

東大阪市

# 花屋敷遺跡 4

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査報告書

2017年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市

# 花屋敷遺跡 4

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査報告書



# 序 文

花屋敷遺跡は、大阪府東大阪市西半に位置する遺跡です。周辺は縄文時代の海進によって形成された河内潟や河内湖の湖岸にあたり、古くから人々が生活する拠点であったことは、数多くの遺跡が発見されていることからもうかがえます。

これまでも近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化や河内花園駅前市街地再開発に伴って発掘調査が行われてきました。その結果、室町時代の溝で区画された屋敷地など、主に中世後半の集落がみつかっています。また、平成23年の調査では、大阪府下でもあまり例をみない、北宋の銅銭をまとめて埋納した銭貨埋納遺構が発見され、注目を集めました。

今回の調査は、近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う発掘調査で、これまでと同様鎌倉時代末から室町時代の人々が生活していた痕跡がみつかっており、本遺跡における、さらなる調査成果が得られました。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、近畿日本鉄道株式会社、大阪府教育庁、東大阪市教育委員会をはじめとする関係機関より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 田邊 征夫



## 例 言

1. 本書は大阪府東大阪市吉田一丁目に所在する花屋敷遺跡（調査名：花屋敷遺跡 17－1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、近畿日本鉄道株式会社の委託を受け、大阪府教育庁の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 受託契約名、受託期間、調査及び整理体制は以下の通りである。

受託契約名：近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査

受託期間：平成 29 年 4 月 3 日～平成 29 年 8 月 31 日

現地調査：平成 29 年 4 月 3 日～平成 29 年 4 月 30 日

整理期間：平成 29 年 5 月 1 日～平成 29 年 8 月 31 日

調査体制：公益財団法人大阪府文化財センター

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、

調査課長補佐 三好孝一、副主査 川瀬貴子

4. 遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。
5. 本書の執筆・編集は、川瀬が担当した。
6. 本書に関わる花屋敷遺跡についての写真・実測図などの記録類、出土遺物は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。今後、広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。使用単位はmである。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方位はすべて平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。記号、土色名、土質名の順に記述している。
6. 遺構名は、検出順の通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：1 溝）をつけて表示している。
7. 本書では、調査区平面図は 100 分の 1、遺構断面図は 20 分の 1 を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8. 遺物実測図の縮尺は 4 分の 1 を基本として掲載するが、一部のものに関しては、縮尺を変更して掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文、挿図、写真図版ともに一致する。

# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第1章 調査の経緯と方法 .....	1
第1節 調査の経緯と経過 .....	1
(1) 調査の経緯 .....	1
(2) 調査の経過 .....	2
第2節 調査・整理の方法 .....	3
(1) 調査の方法 .....	3
(2) 整理の方法 .....	5
第2章 遺跡の位置と環境 .....	6
第1節 地理的環境 .....	6
第2節 歴史的環境 .....	6
第3章 基本層序 .....	9
第4章 調査成果 .....	11
第1節 遺構 .....	11
(1) 第1面 .....	11
(2) 第2面 .....	13
(3) 第3面 .....	17
第2節 遺物 .....	21
(1) 第1面遺構出土遺物 .....	21
(2) 第1層・第2層出土遺物 .....	21
(3) 第2面遺構出土遺物 .....	23
(4) 第3面遺構出土遺物 .....	25
(5) 第3層出土遺物 .....	28
(6) 第4層出土遺物 .....	32
第5章 総括 .....	34

写真図版  
抄 録  
奥 付

## 挿 図 目 次

図 1 遺跡位置図.....	1	図 10 第 3 面平面図.....	18
図 2 調査区位置図.....	2	図 11 第 3 面遺構断面図－ 1 .....	19
図 3 地区割図.....	4	図 12 第 3 面遺構断面図－ 2 .....	20
図 4 遺跡分布図.....	7	図 13 第 1 面遺構・第 1 層・第 2 層出土遺物実測図 .....	22
図 5 西壁断面図及び基本層序柱状図.....	10	図 14 第 2 面遺構出土遺物実測図.....	24
図 6 第 1 面平面図.....	12	図 15 第 3 面遺構出土遺物実測図－ 1 .....	26
図 7 第 1 面遺構断面図.....	13	図 16 第 3 面遺構出土遺物実測図－ 2 .....	27
図 8 第 2 面平面図.....	14	図 17 第 3 層出土遺物実測図.....	29
図 9 第 2 面遺構断面図.....	16	図 18 第 3 層・第 4 層出土遺物実測図.....	31

## 表 目 次

表 1 花屋敷遺跡調査一覧.....	3
--------------------	---

## 写 真 図 版 目 次

### 写真図版 1

1. 第 1 面全景（北西から）
2. 第 1 面全景（東から）

### 写真図版 2

1. 第 2 面全景（西から）
2. 第 2 面噴砂検出状況（北東から）
3. 西壁断面（東から）

### 写真図版 3

1. 第 3 面全景（西から）
2. 第 3 面全景（東から）

### 写真図版 4

1. 第 3 面 33 土坑・集石部（北東から）
2. 第 3 面 30 土坑・45 土坑（西から）
3. 第 3 面 27 落ち込み西側（北から）

### 写真図版 5

1. 第 2 面 13 落ち込み・14 溝出土土器
2. 第 3 面 27 落ち込み出土土器

### 写真図版 6

1. 第 3 面 30 土坑出土土器
2. 第 2 面土器溜出土土器
3. 第 2 面 18 土坑・第 1 面 4 溝出土土器
4. 第 3 面 33 土坑・35 土坑・36 土坑・48 土坑・49 土坑出土土器

### 写真図版 7

1. 第 1 層・第 2 層出土土器
2. 第 3 層・第 4 層出土土器
3. 陶磁器

### 写真図版 8

1. 石製品・土製品
2. 石臼
3. 平瓦
4. 軒丸瓦
5. 鳥衾瓦

# 第1章 調査の経緯と方法

## 第1節 調査の経緯と経過

### (1) 調査の経緯

本書は、近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

花屋敷遺跡は、東大阪市吉田一丁目に所在する遺跡である（図1）。生駒山西麓の扇状地性低地に立地する。当遺跡の西端は、玉串川が吉田川と菱江川に分岐する箇所にあたっており、自然堤防として周辺よりやや高くなっている。

遺跡範囲は東西最大長約210m、南北最大長約80mである。主に東西に長い形をとり、南端は近鉄奈良線付近までとなる。

平成17年度に、近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化並びに河内花園駅前地区第一種市街地開発事業に先立ち（財）大阪府文化財センター（現在は公益財団法人大阪府文化財センター。以下「当センター」と略。）が試掘調査を行った。この試掘調査で遺構・遺物が確認されたため、新たな遺跡として花屋敷遺跡は周知される事となった。

試掘調査の結果を受けて、平成18年度に当センターが近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化（I期工

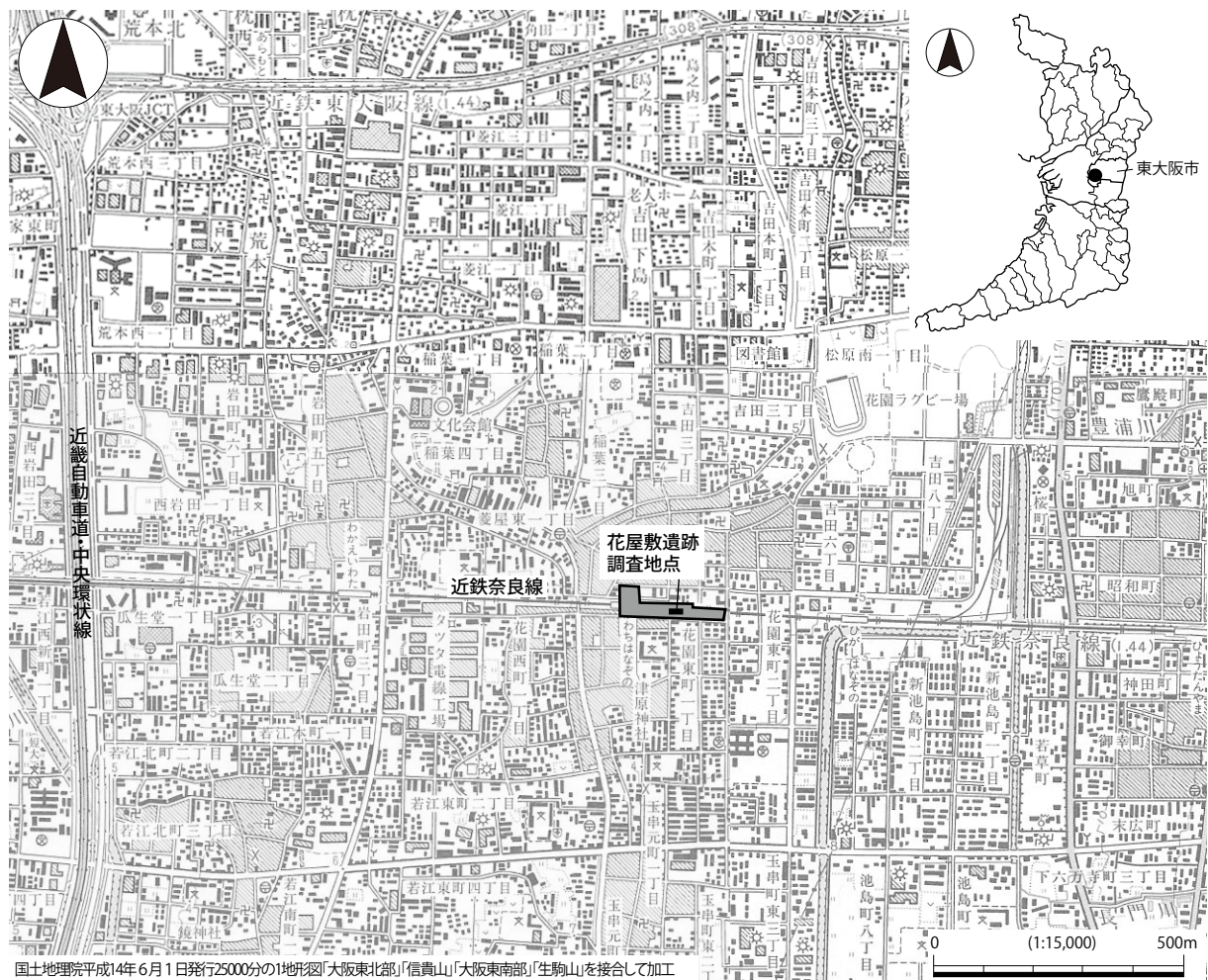


図1 遺跡位置図

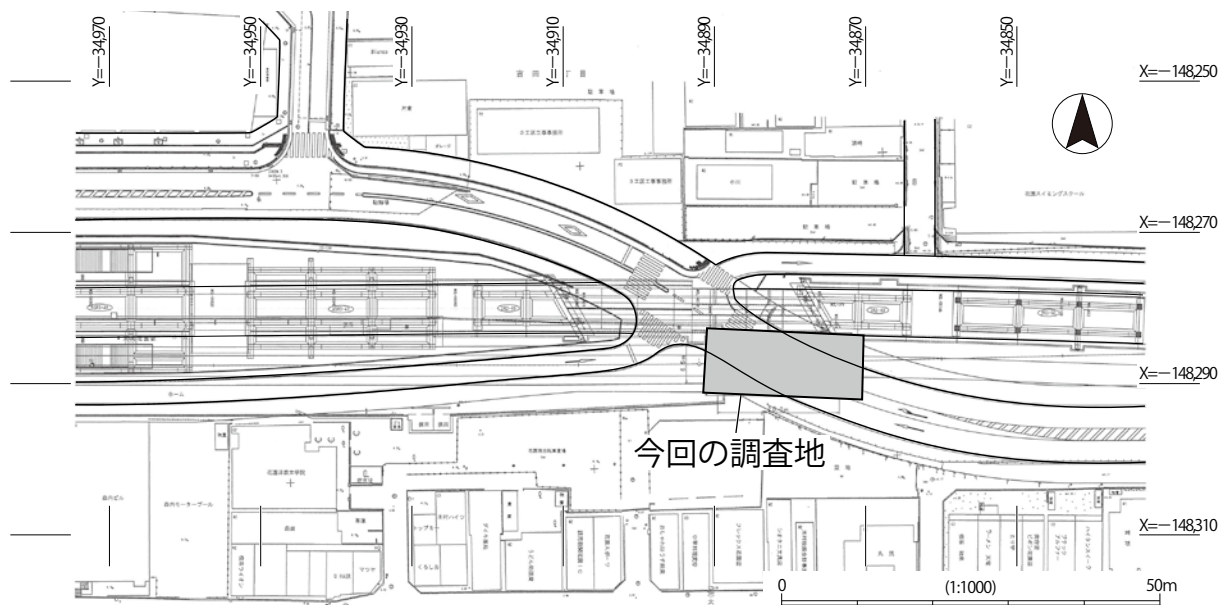


図2 調査区位置図

事)並びに河内花園駅前地区第一種市街地開発事業に伴う発掘調査を実施した。その結果、室町時代の屋敷地やそれに伴う掘立柱建物、井戸、溝等の遺構や土器や瓦、木製品等の遺物を確認することとなった(『花屋敷遺跡Ⅰ』『花屋敷遺跡Ⅱ』2007)。この近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化のⅠ期工事は平成22年に完成している。

その後、近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業で、南側へ橋脚を拡幅するⅡ期工事が行われることとなり、新たに橋脚が設置される9箇所について、当センターによって平成22～23年にわたって発掘調査が実施された。この調査範囲には瓜生堂遺跡、岩田遺跡、花屋敷遺跡が含まれるが、花屋敷遺跡に該当するのは、最も東の橋脚部にあたる一箇所である。

この調査で、花屋敷遺跡では鎌倉時代から室町時代の集落、掘立柱建物や井戸、土坑等を検出した。また、区画溝の岸部から銭貨埋納遺構を検出している。銭貨埋納遺構は府下でも希少な出土例であり、中国銭貨約15,400枚が一箇所にかたまって埋納された状態でみつまっている(『瓜生堂遺跡4 岩田遺跡2 花屋敷遺跡3』2012)。

今回の調査は、Ⅱ期工事の中で近畿日本鉄道奈良線河内花園駅東側の高架下を走行する、都市計画道路大阪瓢箪山線の街路整備事業のため実施することとなった。

近畿日本鉄道株式会社と当センターは平成29年3月29日付で「近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査」の委託契約を締結し、同年4月に現地調査に着手した。実施期間は発掘調査、整理作業をあわせて平成29年4月3日から平成29年8月31日である。

## (2) 調査の経過

今回の調査対象箇所は、近鉄奈良線河内花園駅から東に約70mのところにある(図2)。奈良線の高架下に位置し、北は旧軌道敷部分に一部接している。東西幅約20m、南北長約6.5mの範囲で、面積約130㎡である。調査区は一つで、この調査区を17-1-1区として発掘調査を行った。

平成18年度調査の06-1-1・2区、06-2-3区、平成22年度調査の10-1-9区が西に、平成18年度調査の06-2-1・2区が東にあり、17-1-1区はこの間に位置している(図3)。



表1 花屋敷遺跡調査一覧

調査名	調査期間	所在地	調査面積 (㎡)	調査組織	調査原因	主な遺構	主な遺物	掲載文献
花屋敷遺跡 06-1	2006.05～2006.07	吉田1丁目	160	センター	河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業	土坑、ピット、井戸、溝	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、木製品	花屋敷遺跡 I
花屋敷遺跡 06-2	2006.05～2006.07	吉田1丁目	792	センター	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化	掘立柱建物、柱穴、溝、土坑、ピット、井戸、流路	土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、木製品	花屋敷遺跡 II
花屋敷遺跡 10-1	2012.03～2012.04	吉田1丁目	287	センター	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化	掘立柱建物、溝、土坑、井戸、焼土坑、銭貨埋納遺構	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、銭貨、木製品	瓜生堂遺跡 4 岩田遺跡 2 花屋敷遺跡 3
花屋敷遺跡 17-1	2017.04～2017.04	吉田1丁目	130	センター	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化	溝、土坑、ピット、落ち込み	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、銭貨、石製品、土製品	本報告書 (花屋敷遺跡 4)

平成29年4月3日から平成29年4月30日まで発掘調査を行った。4月3日から機械掘削を開始し、4月6日から人力掘削を行った。

調査では機械掘削、人力（包含層）掘削、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、図化作業などを順次行った。遺構面は3面を数え、各遺構面の調査終了時には、足場台を使用した写真撮影を行った。発掘作業と並行して、現地では出土した遺物の登録や洗浄などの基礎整理作業も実施した。

大阪府教育庁による立会は4月25日に最終遺構面で行い、調査完了の判断の下、近畿日本鉄道株式会社に引き渡すこととなった。

発掘調査終了後、中部調査事務所で整理作業を行い、報告書を平成29年8月に刊行して、すべての作業を完了した。

## 第2節 調査・整理の方法

当センターには『遺跡調査基本マニュアル』2010という発掘調査のマニュアル（以下、マニュアル）があり、これに拠って発掘調査並びに整理作業を行った。

### （1）調査の方法

**調査区割** 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、マニュアルに基づき平面直角座標系第VI系（世界測地系）を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第I～第IVまでの大小4段階の区画を設定した。

第I区画は、大阪府の南西端  $X = -192,000$  m、 $Y = -88,000$  mを基準とし、南北方向に6 km、東西方向に8 kmで府域を62区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へ0～8とする。第II区画は、第I区画を南北方向に1.5 km、東西方向に2.0 kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。第III区画は第II区画を100 m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。第IV区画は、第III区画を10 m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。

今回の調査地は第I区画がH6、第II区画が7、第III区画が9Mにあたる。第IV区画は9i、8iとなる（図3）。

出土遺物を取り上げる際には、第I区画から第IV区画までをラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。

**調査名・調査区の設定・呼称** 当センターでは、マニュアルに従って遺跡名に調査年度を加えた調査

名称を使用している。従って、今回の調査名は花屋敷遺跡 17-1 となる。

調査区名は、調査区が 1 つであるため調査名の後ろに 1 区をつけて、17-1-1 区と呼称することとした。

**遺構名** 遺構の検出順に、1 からの通し番号を遺構種別の前に付与した（例：1 溝）。遺構種別は、発掘調査時から整理作業の際に検討して変更したものもある（例：井戸→土坑）。また、集石部など一定の範囲でとらえた遺構については、通し番号がないものもある。

**掘削方法** 今回は調査区の掘削設計深度が 1.8 m であったため、鋼矢板等による土留は行わず、オーブンカットの工法で行った。

まず、現地表から砕石などの盛土を重機で掘削した。機械掘削深度は 0.6 ~ 0.8 m であった。

それ以下を人力によって層ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

人力掘削は 1.0 ~ 1.2 m であった。人力掘削はシャベル等を使用して行き、土砂の排出はベルトコンベアを使用した。遺構の掘削はヘラやスコップを用いて慎重に行った。湧水や雨水はポンプを用いて場外へ排水した。

**遺構面と層** 盛土は除外して、第 1 面に至るまでの包含層を第 1 層、第 2 面に至るまでの包含層を第 2 層、第 3 面に至るまでの包含層を第 3 層とし、第 3 面の下層を第 4 層とした。第 1 層から第 4 層に分層できたのは主に調査区西半で、東半は谷状に東に落ち込んでいく地形をとるため、必ずしもこの層序をとらず、落ち込んだ部分の堆積を青灰色シルト層などと表現してラベルに記述した場合もある。

**記録作業** 今回の調査区は狭小であることや立地状況などから、ラフタークレーン等による写真測量は行っていない。委託契約を結び、調査区周辺に 4 級基準点を 2 点打設し、これを使用して手計りで遺構実測図を作成、平面測量を実施した。

遺構面は 50 分の 1 の平面図を作成し、必要な場合には、コンター測量を行い、高低差など地形の変化を記録した。

また、個別遺構の平面図・断面図・立面図や出土状況図については、必要に応じて、10 分の 1、20 分の 1 等で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては調査区外周の北、西の壁面を通して 20 分の 1

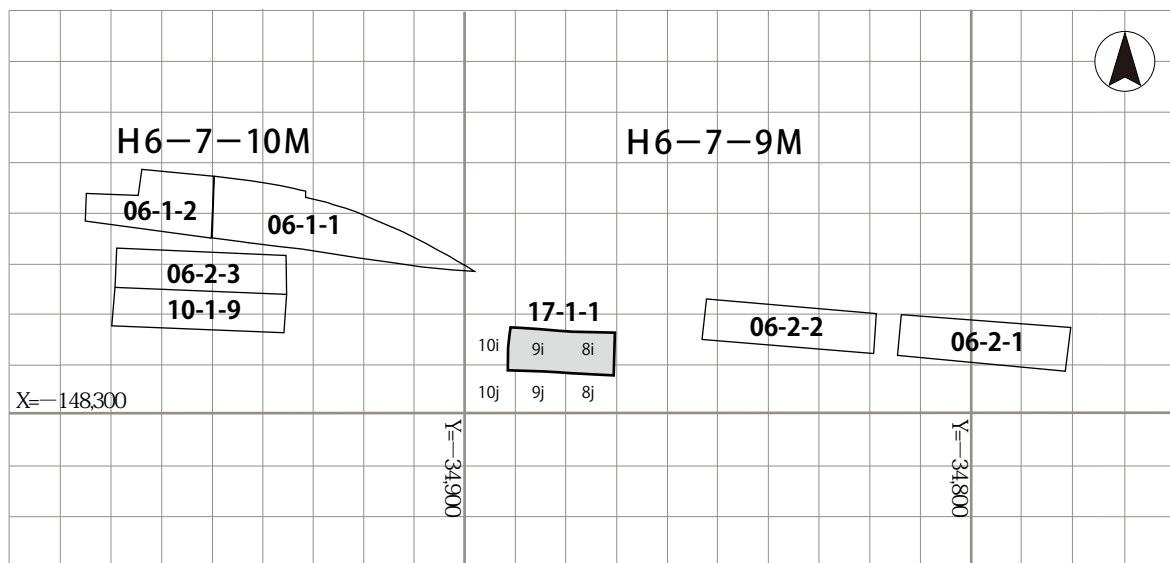


図3 地区割図(S=1/1500)

の断面図を作成した。

現場での写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、各々について黑白フィルム、カラーリバーサルフィルムを用いて行った。また、写真台帳作成用にコンパクトデジタルカメラを使用して撮影を行った。フィルムカメラについては、ネガと焼き付け写真を、デジタルカメラについてはTIFFデータを成果品として作成した。

主要な遺構面の全景写真撮影に関しては、足場台を用いて行った。

**立会** 最終遺構面の調査が終了した段階に、大阪府教育庁の立会を受けた。

**基礎整理作業** 現地調査時には遺物の登録、洗浄、注記や遺構実測図、遺構写真の整理などの基礎整理作業を行った。

## (2) 整理の方法

平面図や主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。遺構挿図の合成はAdobe社製PhotoshopCS6を用いて行い、浄書はAdobe社製IllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。

出土遺物は、接合、復元を行った後、実測作業を実施した。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。遺物実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、合成はAdobe社製PhotoshopCS6を用いて行い、浄書はAdobe社製IllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、フィルムのスキャニング作業を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別して写真撮影を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。

以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施して報告書を完成した。印刷原稿入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

また、編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、挿図番号や写真図版番号が確定すると個々の遺物に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。

写真台帳はFileMakerでデータベースの台帳を現地作業時から作成していたが、掲載遺物番号、掲載写真番号なども登録し、収納場所などが検索できるよう整備し、今後の活用に対応できるよう努めた。

遺物台帳は現場での取り上げ時に簡易なものを作成し、整理後FileMakerで台帳入力し、出土地区、遺構ごとなどで検索できるよう努めた。

遺構実測図についても図面種類ごとに並べ替え、図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号、掲載遺物順に並べ替え、図面ケースに並べ替えた。

以上の調査成果品並びに測量成果品は納品確認を行った後、当センターによって保管している。展示などに今後活用されることを期待したい。



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

花屋敷遺跡は東大阪市吉田一丁目に所在する。東西約210m、南北約80mの範囲で広がる、中世の遺跡である。

花屋敷遺跡が所在する東大阪市は大阪府のほぼ中央に位置する。現在の行政区分で言えば北は大東市、西は大阪市、南は八尾市、東は奈良県生駒市と接する。人口は平成27年現在で約50万1520人を数える。昭和42年に布施、河内、枚岡の3市が合併して東大阪市となり、平成29年2月で市制50周年を迎えた。また、平成17年には中核市へと移行している、大阪府下でも比較的大きな市である。

花屋敷遺跡は東大阪市の中でも中心部やや西寄りに位置し、近畿日本鉄道奈良線河内花園駅の北にある。遺跡としては、瓜生堂遺跡群と東部の生駒山西麓の遺跡群（鬼虎川遺跡群）の間に立地する。

この周辺は、河内平野でも東の生駒山地からの流水作用による扇状地性低地であった。花屋敷遺跡はその先端に立地するが、付近には旧河道が形成した自然堤防が点在する。旧大和川の流路の一つである玉串川が吉田川と菱江川に分岐する箇所にあたるため、洪水砂の堆積が顕著で現地表高はT.P. + 4.0m強であるが、周辺より1～2m標高が高い。今回の調査では現地表から約2mの掘削にとどまったが、中世遺構面の基盤層以下は粗い砂礫層となり、窪んだ所には常に水が滲み出るような湿潤な環境にある。

### 第2節 歴史的環境

花屋敷遺跡が立地する河内平野には、縄文時代から近世の遺跡が数多く所在している（図4）。

**縄文時代** 縄文時代前期、海水面の上昇等により河内湾が形成された。縄文海進は生駒山西麓付近まで及び、鬼虎川遺跡では海水によって浸食された崖面が観察される。縄文時代中期には、河内湾は土砂の堆積によって次第に埋没し、河内潟となる。花屋敷遺跡より約1.5km南にある池島・福万寺遺跡では、縄文時代後期の土器が出土している。

**弥生時代** 縄文時代晩期から弥生時代初めには、河内湾は河内湖となり、河内湖周辺に人が居住するようになり、遺跡の数も増加する傾向にある。

花屋敷遺跡の南西にある若江北遺跡では、弥生時代前期初頭の集落と水田が確認されている。池島・福万寺遺跡でも、弥生時代前期初頭の集落域、水田域、墓域が確認されている。

弥生時代前期中葉には、若江北遺跡のさらに南の山賀遺跡でも集落と水田が確認されている。花屋敷遺跡の西にある瓜生堂遺跡や北の稲葉遺跡でも、集落が確認されている。

弥生時代中期になると、遺跡の数が飛躍的に増加する。花屋敷遺跡の西にある瓜生堂遺跡群（瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、若江遺跡、山賀遺跡）では、集落域や墓域が確認されている。また、生駒山西麓にある鬼虎川遺跡群（鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡等）でも、集落域が確認されている。

弥生時代後期になると河川の氾濫による影響を受け、やや遺跡数が減少する。瓜生堂遺跡や岩田遺跡で、集石遺構や水田が確認されている。

**古墳時代** 古墳時代も遺跡数は多いが、河川の氾濫によって不安定な環境となるため、一つの遺跡の存続期間は短い。西岩田遺跡や新家遺跡では集落が築かれている。また、瓜生堂遺跡や岩田遺跡では円筒埴輪が多数出土しており、埋没古墳の存在が示唆される。

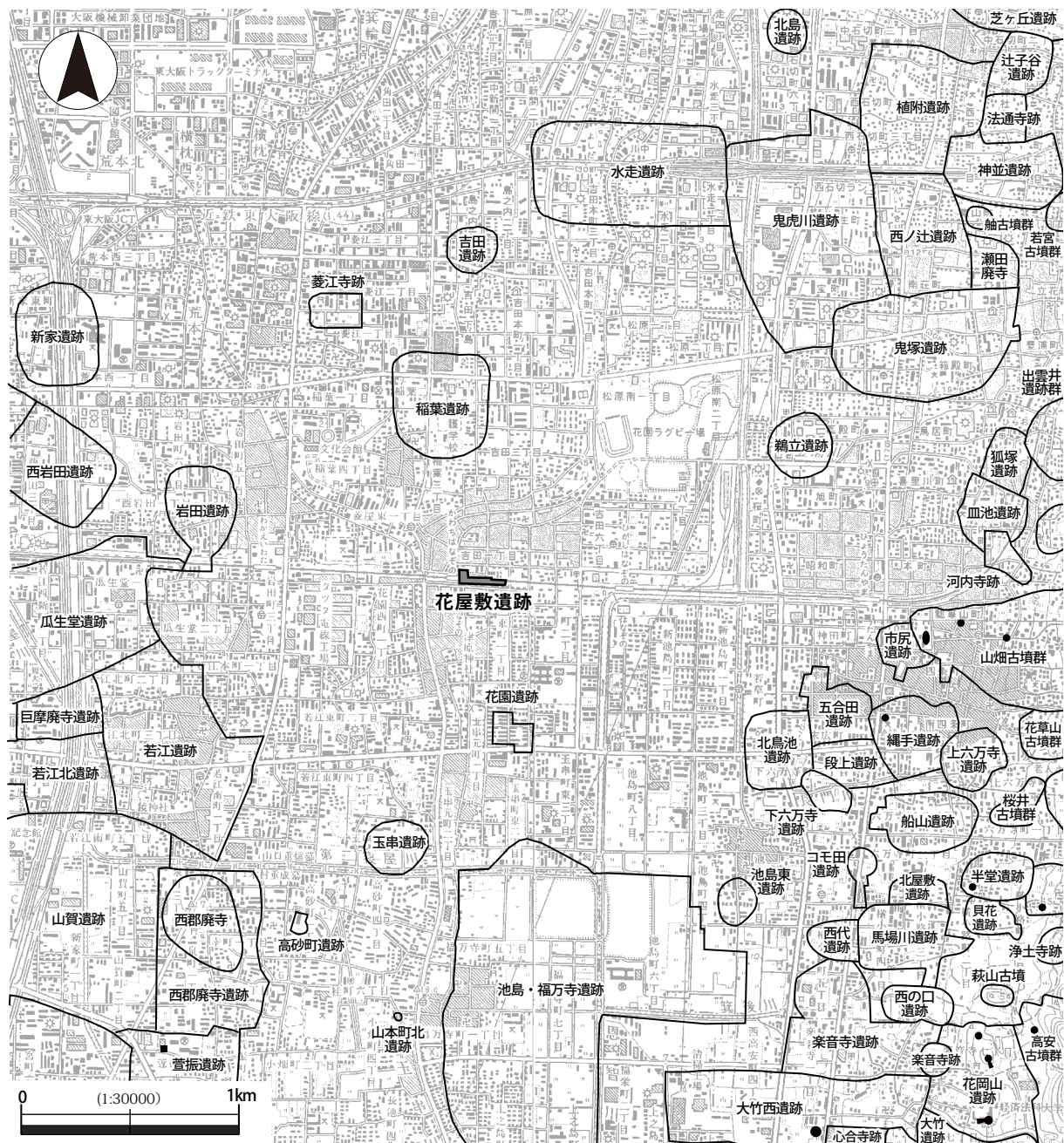


図4 遺跡分布図

古代 瓜生堂遺跡では8世紀、あるいは9世紀以降の集落が確認されている。

また、岩田遺跡では8世紀中ごろから10世紀の集落が検出されており、円面硯や帯金具、墨書土器など、官人に関連した遺物も出土している。

若江遺跡では素弁蓮華文軒丸瓦が出土することから、飛鳥時代後期に創建された寺院の存在が推測される。遺構は確認されていないが、他に川原寺式に類似する瓦や「足得」「中臣」のスタンプがある恭仁京式文字瓦、平城京・恭仁京と同範の軒平瓦なども出土しており、中央政権との強力な関係があったことが推測される。

中世 中世になると、河川の氾濫が安定することから集落や水田が多く形成されるようになる。

瓜生堂遺跡では12世紀から15世紀の集落が確認されている。岩田遺跡では12世紀前半から15世紀中頃の集落が確認され、13世紀の中から後半に大きな溝で集落が区画されるようになる。巨摩廃寺

遺跡では 12 世紀後半から 15 世紀の集落が確認されている。

花屋敷遺跡の北東にある水走遺跡は、旧吉田川沿いの遺跡である。中世前期に中河内一帯に勢力を持った水走氏に関連する遺跡である。水走氏は河内国一之宮平（枚）岡神社の神職や、皇領の大江御厨の管理と警護も兼ねた在地領主である。中世後期には畠山氏の臣下となる。周辺地域の管理や支配に強い勢力をふるっていたと考えられる。12 世紀後半の堤防や 13 世紀の祭祀遺構、集落を検出している。

生駒山西麓部でも鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡・神並遺跡等で、中世の遺構を検出している。

花屋敷遺跡では、13 世紀から 16 世紀の集落域が確認されている。

06－1－1 区では、区画大溝から大量の土器や木製品が出土している。木製品が漆器や曲物に混じって、人名や品名を描いた荷札木簡が出土したことが特筆される。

06－2－2 区でも溝で区画された屋敷地を検出しており、掘立柱建物や井戸を検出している。

10－1－9 区でも南北方向の大溝を多数検出しており、その内からは掘立柱建物や井戸が検出されている。第 6 面の土坑から 15,392 枚の銭貨が渦を巻くような状態で出土した。銭貨はすべて中国銭で、6 世紀から 12 世紀までのものがみられるが、中心となるのは北宋の時代である。銭貨埋納遺構として、これだけの銭貨がかたまっただけで出土するのは、全国的にも希少である。

南北朝の内乱を経て、河内周辺の守護職は畠山氏となり、14 世紀末に若江城を遊佐氏に築城させるが、やがて河内国守護所は高屋城へ移される。その後、織田信長が入洛すると同城を三好氏に与える。若江城は、発掘調査では土塁や堀・井戸などが確認されているが、天正 8（1580）年に廃城となると、河内国の中心は南の八尾に移っていくようである。

**近世** 近世になると、顕著な遺跡はみあたらない。しかし、旧大和川の支流である玉串川の水運を活かして物資の運搬や集積が盛んに行われていたようで、市場という地名も残る。水運を使った交通の要所であったことは間違いない。

#### 〈第 1 章・第 2 章の参考文献〉

岡本圭司 2007 『花屋敷遺跡 I』 財団法人大阪府文化財センター

岡本圭司・影山美智与 2007 『花屋敷遺跡 II』 財団法人大阪府文化財センター

黒須亜希子 2012 『瓜生堂遺跡 4 岩田遺跡 2 花屋敷遺跡 3』 公益財団法人大阪府文化財センター

福永信雄他 2002 『瓜生堂遺跡第 45 次発掘調査概要報告』 東大阪市教育委員会

秋山浩三・川瀬貴子他 2004 『瓜生堂遺跡 1』 財団法人大阪府文化財センター

金光正裕・川瀬貴子 2004 『岩田遺跡』 財団法人大阪府文化財センター

東大阪市教育委員会編 2010 『一わが街発見－東大阪市の遺跡ガイドブック』

### 第3章 基本層序

17-1-1区の調査では、現地表面から約2.0mを掘削した。3面の遺構面と、大きく分けて4層を確認し、各々を第1層から第4層と呼称した。第2層から第4層はしまり具合や砂質によって、さらに細分することが可能である。

第2層から第3層の層序の堆積は、調査区の西端から7、8m、約3分の1までは明確に観察できるが、それより東になると第1層の直下から谷状に落ちていく地形となり、そこに青灰色シルトが堆積する湿地の様相を呈する。地層断面観察は北壁と西壁で実施したが、堆積状況をよく示す西壁を図示して説明する(図5)。

**盛土層** 現地表面高はT.P. + 4.0～4.4mであった。北西部が最も高く、南西部が最も低い。そこから0.6～0.8mは近現代の盛土層である。旧線路軌道敷にあたるため一部は碎石や10YR5/6黄褐色極細砂の真砂土などで、土壌の改良が行われていた。特に調査区の北端、南端はそれぞれ東西を溝状に大きく、攪乱されている。機械にて掘削した。

**第1層** 盛土を除去したあとの、第1面を検出するまで、細かい単位で土壌が堆積する(図5の番号2・3・4)。広範囲で確認できた層(図5-4)を第1層とした。10YR4/4褐色シルトである。中世末期の耕作土であろう。約0.2mの厚さである。西と東では約0.1～2mの比高があり、現地表と同じく、西の方が高い。

図5-1・2の層はいずれも整地土と思われ、土器の細片を多く含んでいる。

**第2層** 第1面から第2面までの層を第2層とした。中世後期の包含層で、15世紀後半代の遺物を多く含む。

10YR4/3にぶい黄褐色極細砂混シルトや10YR4/2灰褐色極細砂混シルトを基本とする。約0.8mの厚さである。何層かに分層可能だが、いずれも整地土層である。

第2層上面でT.P. + 3.5～3.7mの高さとなる。西と東の比高は徐々に小さくなる。

**第3層** 第2面から第3面までの包含層を第3層とした。中世後期の包含層で、15世紀中～後半代の遺物を多く含む。遺物の含有量は第3層が最も多い。2.5Y4/2暗灰黄色極細砂混シルトや2.5Y4/4褐色極細砂混シルトを基本とし、約0.6mの厚さである。分層可能だが、いずれも整地土層である。

第3層上面でT.P. + 3.0～3.1mの高さとなる。西と東の比高は0.1m程度である。

**第4層** 第4層上面で検出した遺構面を第3面としたが、第4層まで遺物を包含するため、掘削した。中世の包含層で、第3面の遺構出土遺物と同じく、14世紀前半代の遺物を多く含む。

第4層上面でT.P. + 2.4～2.5mの高さとなる。10YR5/2灰黄褐色細砂～粗砂混シルトを基本とする。第2層、第3層に比べると砂質が強くなり、しまりが悪くなるため、絶えず湧水するような土質である。第4層上面でT.P. + 2.5～2.6mの高さとなる。約0.2mの厚さである。

**第5層** 第4層を除去すると、地山面(無遺物層)となる。10YR5/4にぶい黄褐色シルト混細砂～粗砂を基本とする。

**青灰色シルト層(落ち込み埋土)** 図5の西壁では観察できないが、調査区の中央から東は第2面で13落ち込み、第3面で27落ち込みという名称を与えた、西から東に傾斜していく落ち込み地形であった。

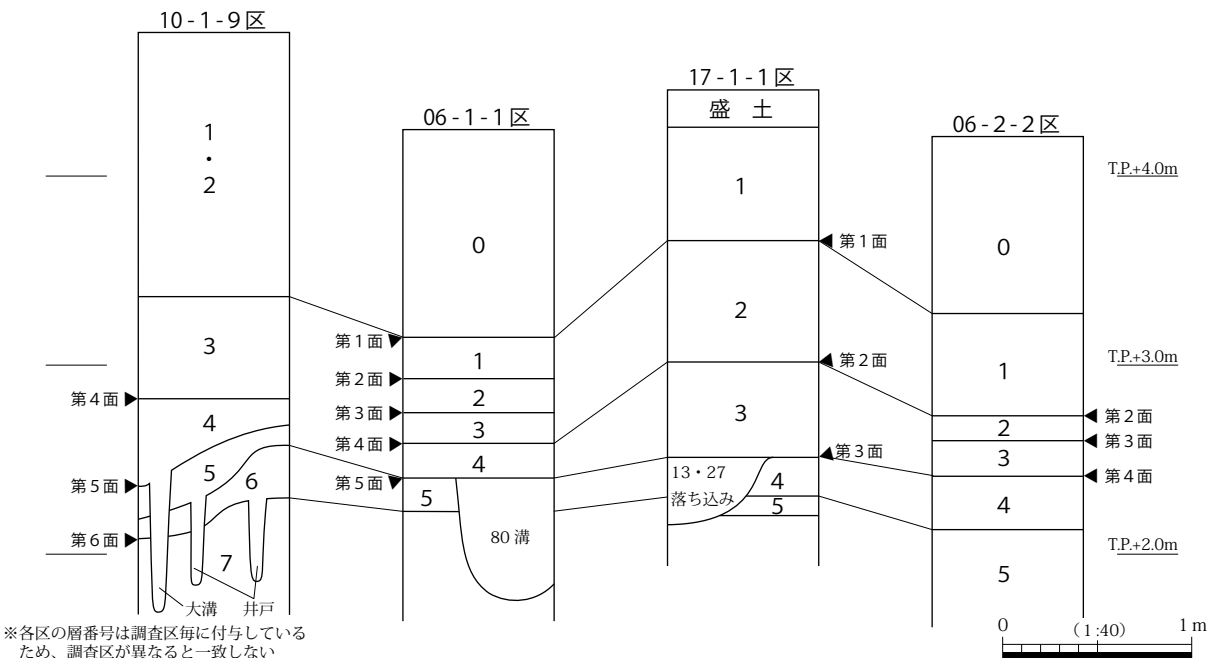
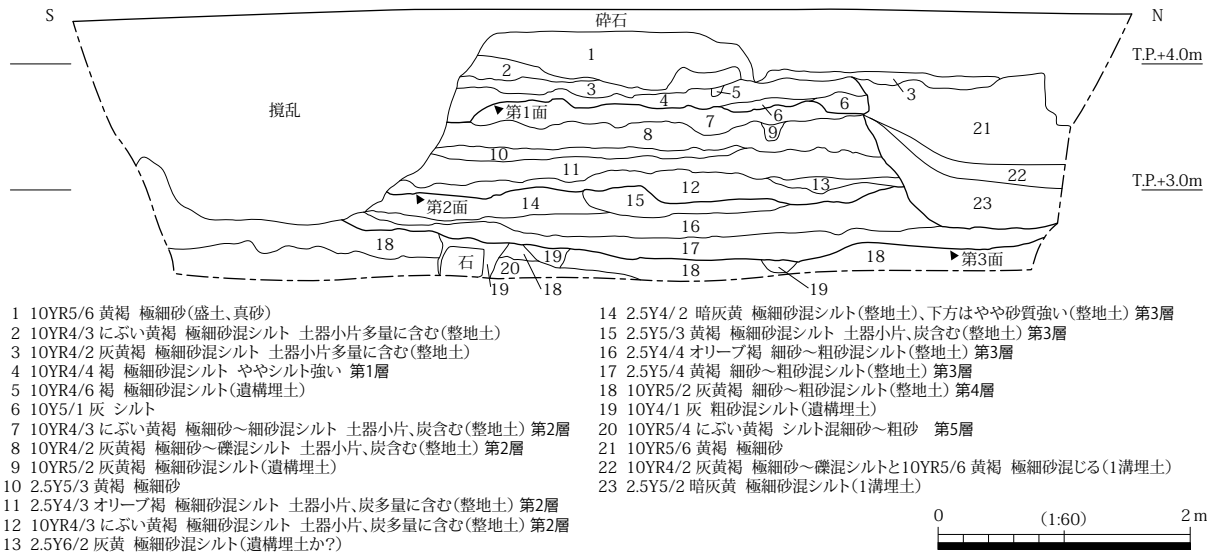


図5 西壁断面図及び基本層序柱状図

ここに堆積する土は、5Y4/1 灰色粗砂～礫混シルトを基本とする。上層が粘質が強く、下層にいくほど基盤層の影響を受けてか、砂礫を多く含むようになる。絶えず湧水する、沼地状の堆積層であったと推測するが、木や植物などの有機物はみあたらない。

上層には15世紀代の遺物を、下層には14世紀前半代の遺物を含むが、1片だけ古墳時代の須恵器が出土している。

既往の調査成果との対照を簡潔に記す。調査区は隣接していないため、検出高や土質、出土遺物からの判断である。10-1-9区の第3層・第4層・第5層が17-1-1区の第2・3層に、10-1-9区の第6層が17-1-1区の第4層に対応すると思われる。06-2-2区の第2・3層が17-1-1区の第3層に、06-2-2区の第4層が17-1-1区の第4層に対応すると思われる。06-1-1区の第4層が17-1-1区の第3層に、06-1-1区の第5層が17-1-1区の第4層に対応すると思われる。

## 第4章 調査成果

### 第1節 遺構

合計3面の遺構面を検出した。基本層序の章でも述べたが、中央から東にむかっては落ち込んでいく谷状地形になっており、残る西側も整地が繰り返されているため、細かい単位で地層が堆積するため遺構面の把握が難しかった。整地土層の間層に砂礫層を挟むことや側溝からの断面観察によって、遺構面を決定した。

#### (1) 第1面 (図5・6・7、写真図版1)

検出高はT.P. + 3.5～3.7 mである。西が高く、東にいくほど低い。盛土や黄褐色の整地土層(第1層)を除去して検出した。調査区の全域で東西方向にのびる6条の溝と土坑、ピットを検出した。

**1溝** 調査区の北端で検出した。東西の正方位に対して平行にのびる大溝である。長さは、東西とも調査区外にのびるため、実際はもっと長く、北肩は調査区より北にのびているため、幅も不明である。

検出長20.2 m、検出最大幅1.8 m、深さ1.4 mで、断面はU字形を呈する。(図5)。第1面で検出したが、断面で見るともっと上層から掘り込まれた可能性がある。下層には第2層や第3層の土が、上層には近現代の盛土が堆積する。上層は近現代の旧軌道敷設置による攪乱とも重複しており、時期の把握が難しかった。

鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁碗(写真図版7-3)や土師器、瓦質土器、平瓦の破片が出土している。第1面で検出した他の溝と平行であるので1溝もこれらの溝と相関性があるものとし、15世紀後半の遺構と捉えた。

**2溝** 調査区の南端で検出した、東西方向の溝である。ただし、第1面の他の溝がほぼ正方位で互いに平行であるのに、2溝のみが調査区中心よりやや東でいったん南に屈曲して、そこから再び北西にのびる。1溝同様、東西は調査区外にさらにのびる。

検出長19.5 m、幅0.5 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する。(図7)。遺物は瓦や土師器が出土している。規模や形状が第1面の3溝・4溝・5溝・7溝と似ており、15世紀後半の遺構とする。

**3溝** 調査区の中央西側で検出した。1溝と2溝の間に3溝から5溝までと7溝の4条の溝が東西に平行に並ぶが、3溝のみ西半の検出にとどまり、途中で途切れる。長さ7.0 m、幅0.25 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する(図7)。土師器片が出土している。

**4溝** 調査区の中央で検出した。1溝・2溝同様、東西は調査区外にさらにのびる。3溝と南が接している。長さ19.0 m、幅0.4～0.5 m、深さ0.1 mで、断面は浅い皿形を呈する(図7)。15世紀後半の瓦質土器深型火鉢や軒丸瓦、須恵器鉢等が出土した(図13-1・2、写真図版6-3・8-2)。

**5溝** 調査区の中央、1溝の南で検出した。1溝・2溝・4溝同様、東西は調査区外にさらにのびる。4溝と5溝、7溝は約0.5 m間隔で平行に並ぶ。検出長20.0 m、幅0.3～0.4 m、深さ0.05～0.1 mで、断面は浅い皿形を呈する(図7)。遺物は出土していない。

**7溝** 調査区の中央、5溝の南で検出した。1溝・2溝・4溝・5溝同様、東は調査区外にさらにのびる。検出長16.0 m、幅0.2～0.3 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する(図7)。遺物は出土していない。4溝・5溝・7溝は互いに約0.5 mの等間隔であり、関連性が高いと思われる。

**6ピット** 調査区の中央西側で検出した。4溝を切る。直径0.4 m、深さ0.1 cmで、断面は浅い皿



Y=-34,870  
X=-148,280



X=-148,285

X=-148,290

X=-148,295

Y=-34,880

Y=-34,890

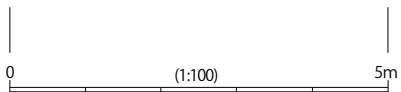
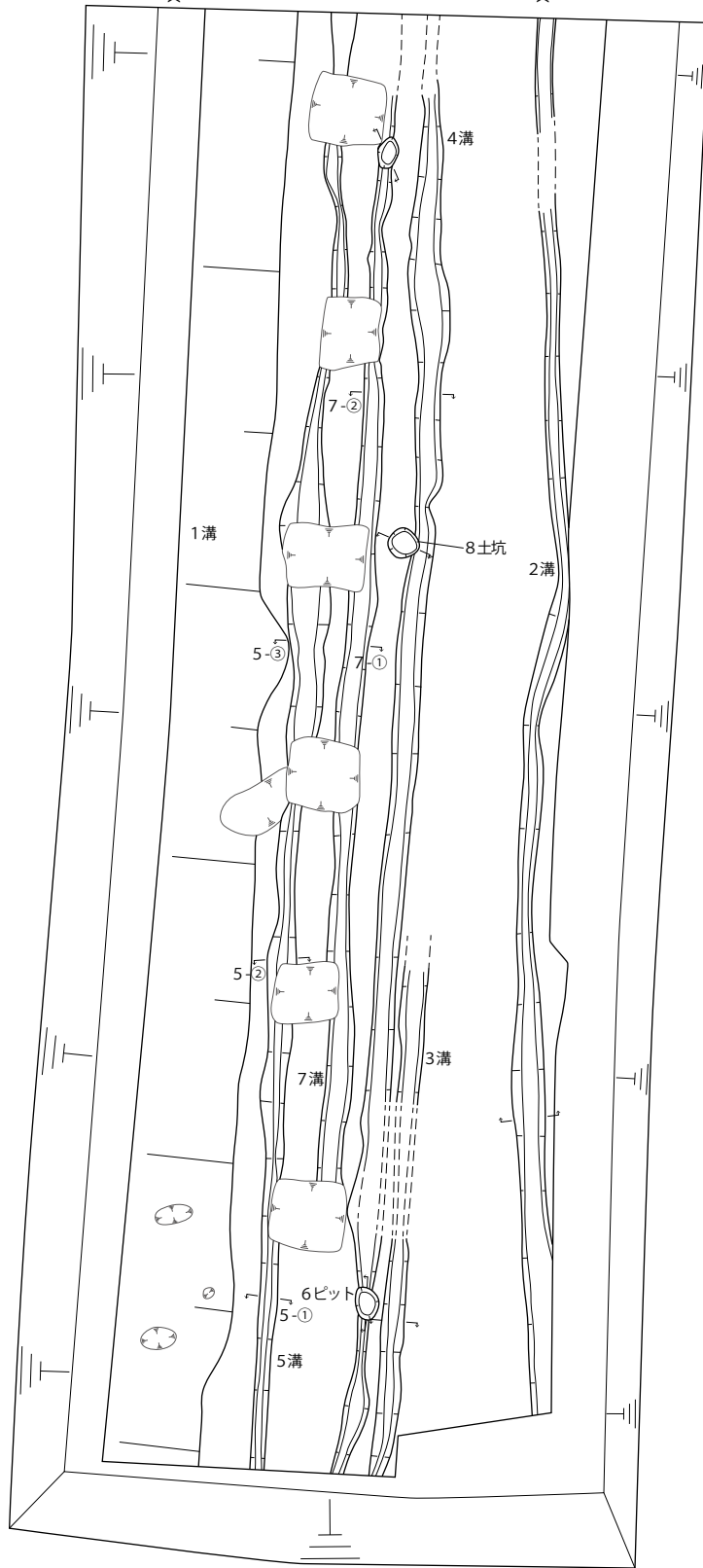


図6 第1面平面図

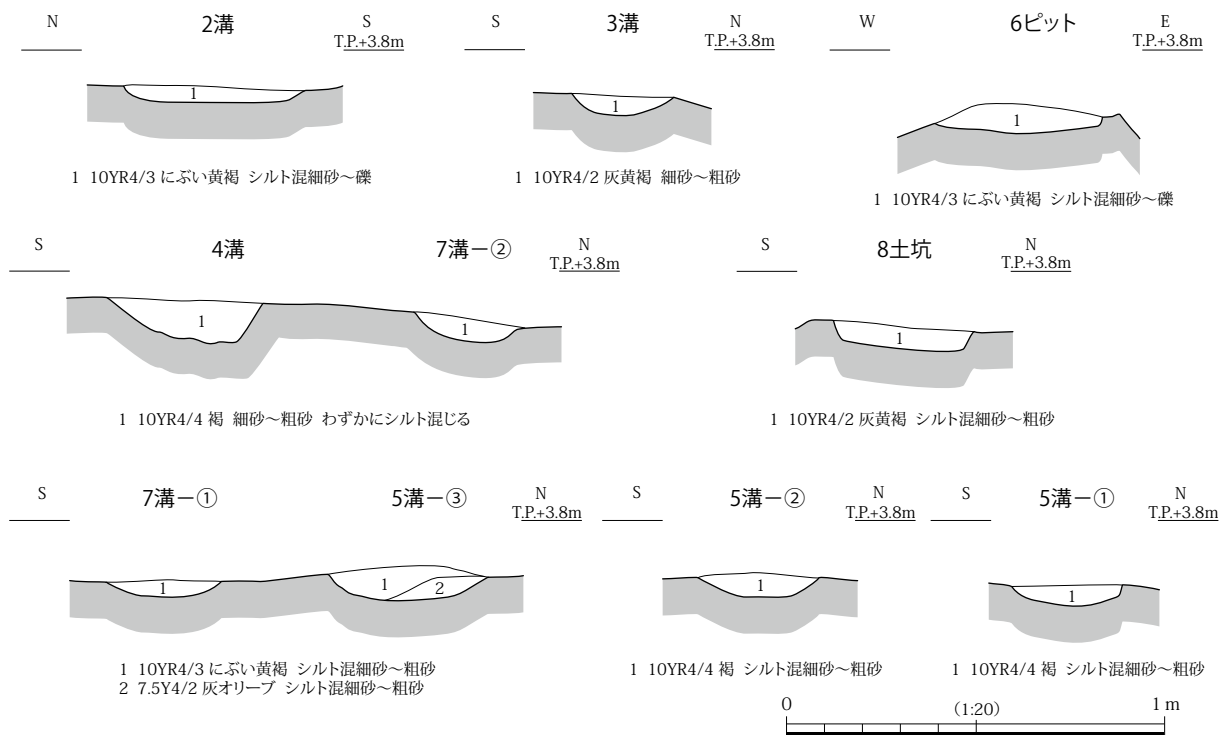


図7 第1面遺構断面図

形を呈する（図7）。遺物は出土していない。

**8土坑** 調査区の中央東寄りで検出した。4溝と南を接する。直径0.35 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する（図7）。土師器片が出土している。

1溝を除いては、同規模の溝が一定間隔に並ぶことから、2溝から7溝は耕作溝と捉える。遺構からの出土遺物は少ないが、包含層からの遺物も含めて、第1面の時期は15世紀後半と考える。

(2) 第2面（図8・9、写真図版2）

検出高はT.P. + 3.0～3.1 mである。西側が若干高い。西端から約3分の1は平坦で、第1面と第2面の間に器形が復元できる状態の土器や瓦を含む整地土層が、幾層にもわたって堆積していた。Y = -34,883 mより東にいくと徐々に落ち込んでいく（13落ち込み）。

また、主に東南部で、地震の液状化現象による噴砂の痕跡を検出した。

**9土坑** 調査区の北部中央で検出した。13落ち込みの西肩に近い。直径0.2 m、深さ0.1 mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**10土坑** 調査区の北部中央で検出した。9土坑の東にある。直径0.4 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**11土坑** 調査区の北東部で検出した。直径0.3 m、深さ0.1 mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**12土坑** 調査区の北西部で検出した。やや大形の土坑である。14溝と攪乱に東半を切られる。直径0.45 m、深さ0.2 mで、断面はU字形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**13落ち込み** 調査区の中央から東で検出した。ゆるやかに東に落ちていく落ち込みである。東端は調査区よりさらに東にあると思われる。検出長13.0 m、深さ0.05 mで、断面は浅い皿形を呈する（図9）。埋土は灰色から青灰色の礫混りシルトであり、湿潤な沼状地形だったと推測できる。



Y=-34870  
X=-148280



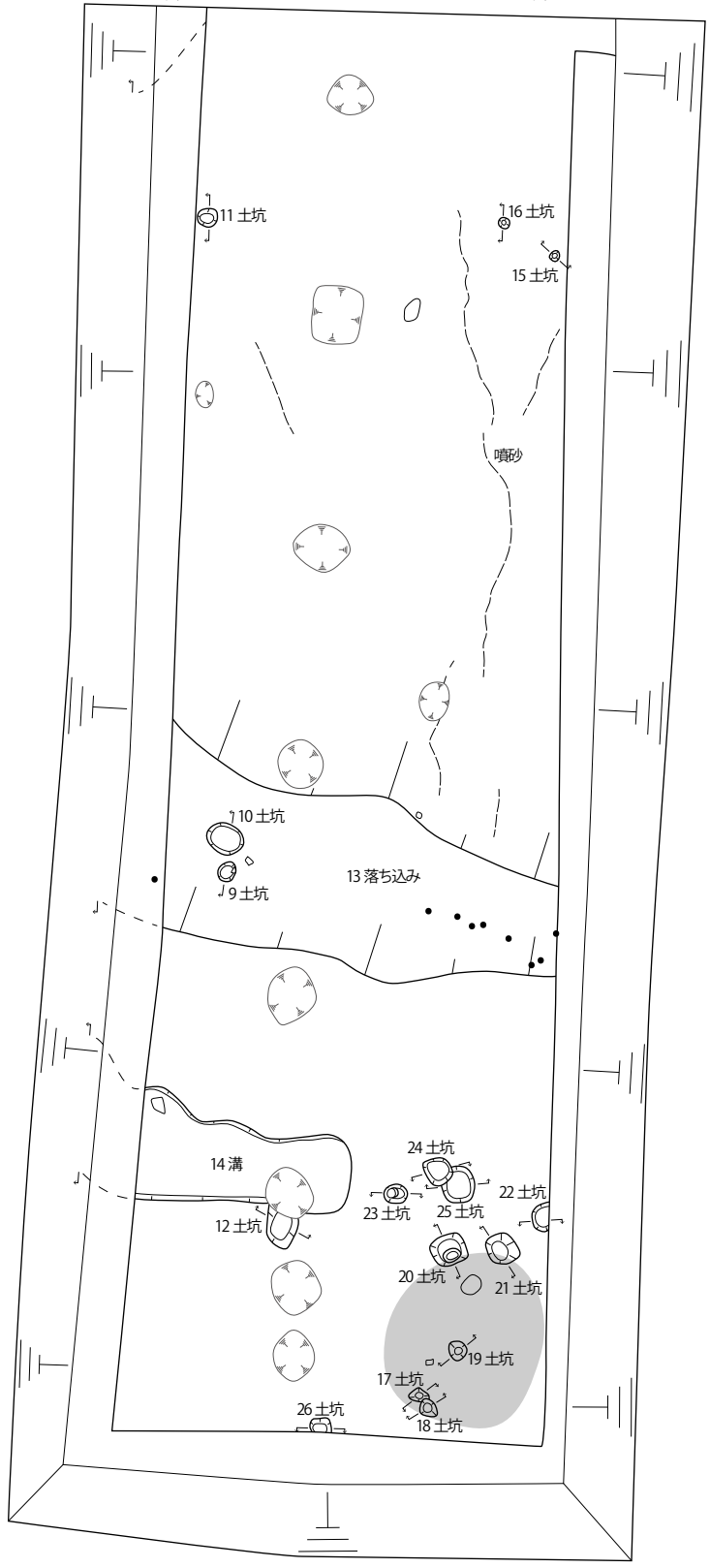
X=-148285

X=-148290

X=-148295

Y=-34880

Y=-34890



--- 噴砂  
● 石  
● 土器溜

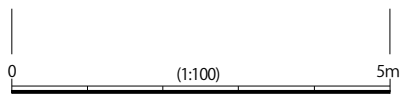


図8 第2面平面図

ここに近隣の生活域からの遺物が流入あるいは投棄されたか、一定量の完形に近い遺物が含まれていた。土師器皿や瓦質土器摺鉢、平瓦などである（図14－16～22、写真図版5－1）。土師器皿は底部が盛り上がったヘソ皿であり、15世紀後半のものである。

**石列** 調査区の中央、13落ち込みの西岸付近で検出した。拳から人頭大の自然石が、東にややふるが一行に並ぶ（図8）。南に2m並ぶが、北端にも認められるので13落ち込みの肩に沿うように並んでいた可能性がある。人為的な意図をもって並べられたのは確かで、13落ち込みの肩を明確にするためか、飛石状に歩くために置かれたものと推定する。

**14溝** 調査区の北西部で検出した。大形の溝で、北端は調査区よりさらに北にのびる。検出長3.0m、最大幅1.8m、深さ0.1mで、断面は浅い皿形を呈する（図9）。瓦質土器摺鉢や土師器皿が出土した（図14－13・14、写真図版5－1）。13落ち込みと同じく、15世紀後半のものである。

**15土坑** 調査区の南東部で検出した。小さな土坑である。直径0.15m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**16土坑** 調査区の南東部で検出した。15土坑の東にある。直径0.2m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**17土坑** 調査区の南西部で検出した。18土坑と接する。直径0.3m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する（図9）。瓦質土器や土師器の小片が出土している。

**18土坑** 調査区の南西部で検出した。17土坑と接する。直径0.3m、深さ0.05mで、断面は皿形を呈する（図9）。土師器皿が出土している（図14－15、写真図版6－3）。13落ち込み、14溝と同時期のものである。

**19土坑** 調査区の南西部で検出した。17土坑の南西にある。直径0.3m、深さ0.05mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**20土坑** 調査区の南西部で検出した。やや大形の土坑で、土坑内に小穴があり、これは柱穴の可能性もある。直径0.4m、深さ0.3mで、断面は逆台形を呈する（図9）。土師器片が出土している。

**21土坑** 調査区の南西部で検出した。直径0.4m、深さ0.05mで、断面は浅い皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**22土坑** 調査区の南西部で検出した。南半は側溝に切られる。直径0.2m、深さ0.1mで、断面は逆台形を呈する（図9）。遺物は出土していない。

**23土坑** 調査区の南西部で検出した。直径0.3m、深さ0.2mで、断面は逆台形を呈する（図9）。土師器片が出土しているが、図化できなかった。

**24土坑** 調査区の南西部で検出した。25土坑を切る。直径0.4m、深さ0.1mで、断面は逆台形を呈する（図9）。土師器片が出土している。

**25土坑** 調査区の南西部で検出した。24土坑に切られる。直径0.4m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する（図9）。遺物は出土していない。17土坑から26土坑は、柱痕は確認できず、並びかたも不規則なので掘立柱建物等の柱穴ではないと判断した。

**噴砂** 調査区の主に南東部で検出した地震痕跡である。断続的にであるが、長さ9.0mにわたって東西方向に線状にみられる（図8、写真図版2－2）。北壁断面の観察によると、第2面から第3面の間で砂が上に上昇している。中世後半では文禄5（1596）年の慶長伏見大地震が有名だが、第2面が15世紀後半とするとこの地震はそれよりも古く、正平15（1360）年の紀伊・摂津で起きた地震、正平

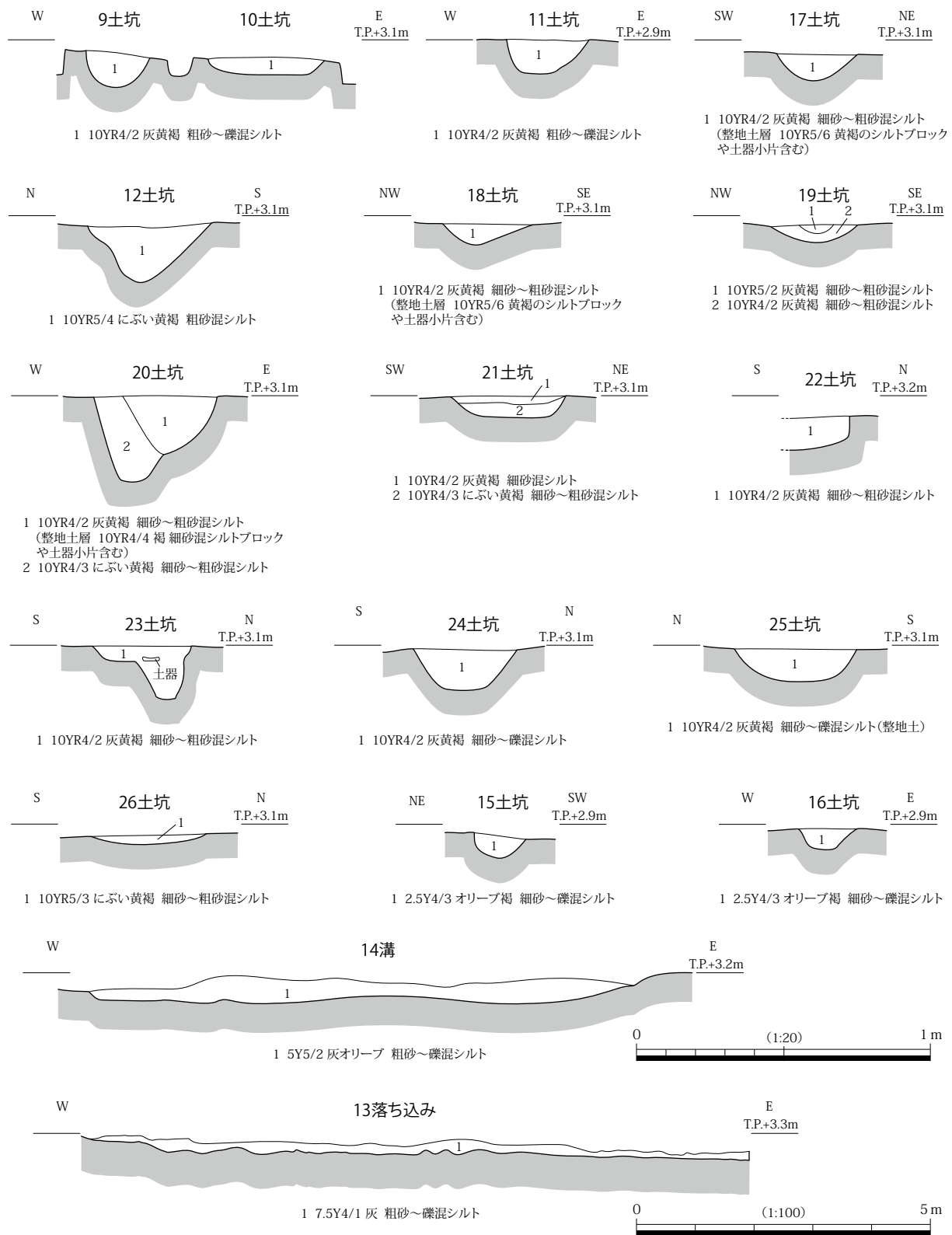


図9 第2面遺構断面図

16 (1361) 年の南海地震、応永 14 (1408) 年の応永地震、宝徳元 (1449) 年の山城・大和で起きた地震などが相当すると思われる。

**土器溜** 調査区の南西部で検出した。東は 20 土坑、21 土坑あたりまで、西は調査区端の 17 土坑、18 土坑のあたりまで広がっていたと想定される。土坑が集中する箇所と重複して、直径 2～3 m の範

囲で土師器皿が20点以上がかたまつて出土した(図8)。重なるように出土しており、使用した土器を一括投棄したものと思われる。土師器皿はいずれもヘソ皿に分類される、ほぼ同じ法量で、15世紀後半を示す(図14-23~30、写真図版6-2)。よって、土器溜も15世紀後半とする。

第2面では、14溝と13落ち込み以外は、主に南西部で土坑を10数基検出するにとどまった。土坑は建物の柱穴となるかも不明で、遺構の性格も不明確である。ただし、土器が集積する土器溜の検出など、居住に伴う遺構であると言えよう。また、第1面より、約0.5m低いところで第2面を検出したが、時期的に大きな隔たりはなく、いずれも中世後半、15世紀代の遺構面と考えられるだろう。

### (3) 第3面(図10~12、写真図版3・4)

検出高はT.P.+2.5~2.7mである。調査区西側は第2面と第3面の間にも、整地土層が約0.5~0.7mにわたって堆積していた。中央から東側は13落ち込みに引き続き、落ち込みが認められる。西側は土坑や溝が密集する。掘立柱建物は検出できていないが、南西部に一定間隔で礎石と思われる石が並ぶところがあり、礎石立建物があつた可能性が高い。

**28 土坑** 調査区の南西部で検出した。大形の不定形土坑で、西半は調査区より外にある。直径1.5m、深さ0.2mで、断面は皿形を呈する(図11)。遺物は出土していない。

**29 土坑** 調査区の南西隅で検出した。不定形の土坑である。直径0.7m、深さ0.2mである。遺物は出土していない。

**34 土坑** 調査区の南西部で検出した。33土坑と南を接する。直径0.25m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する(図11)。底部から自然石が出土した。28土坑や西壁にある自然石とこの石が等間隔で並ぶことから、掘立柱建物の礎盤石だったとも考えられる。遺物は土師器皿等の小片が出土している。

**35 土坑** 調査区の南西部で検出した。34土坑の東、33土坑の北にある。直径0.25m、深さ0.15mで、断面は逆台形を呈する(図11)。遺物は瓦質土器や土師器皿の小片が出土している(図15-35)。

**36 土坑** 調査区の南西部で検出した。35土坑の東、33土坑の北東肩にある。直径0.3m、深さ0.25mで、断面は逆台形を呈する(図11)。遺物は瓦質土器羽釜や土師器皿の小片が出土している(図15-39、写真図版6-4)。

**38 溝** 調査区の西端で検出した。長円形の溝である。長さ1.5m、幅0.2m、深さ0.05mで、断面は浅い皿形を呈する(図11)。遺物は出土していない。

**39 ピット** 調査区の南西部で検出した。直径0.2m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する(図11)。遺物は土師器片が出土している。

**40 溝** 調査区の南西部で検出した。南は調査区より外にのびる。検出長1.2m、幅0.15m、深さ0.1mで、断面はU字形を呈する(図11)。遺物は土師器や瓦質羽釜の小片が出土している。

**41 土坑** 調査区の北西隅で検出した。不定形の土坑である。直径0.6m、深さ0.05mをはかる(図11)。中心から直径15cm程度の木が出土した。

**42 土坑** 調査区の北西部で検出した。長円形の土坑である。長径0.7m、短径0.35m、深さ0.1mで、断面は皿形を呈する(図11)。遺物は瓦器片が出土している。

**43 土坑** 調査区の北西部で検出した。大形の隅丸方形の土坑である。検出長0.95m、幅0.9m、深さ0.2mで、断面は皿形を呈する(図11)。遺物は土師器片が出土している。

**44 土坑** 調査区の北西部で検出した。大形の土坑で、43土坑に北側を切られる。直径0.6m、深さ0.2mで、断面は皿形を呈する(図11)。遺物は土師器片が出土している。

Y=-34,870  
X=-148,280



X=-148,285

X=-148,290

X=-148,295

Y=-34,880

Y=-34,890

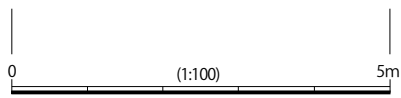
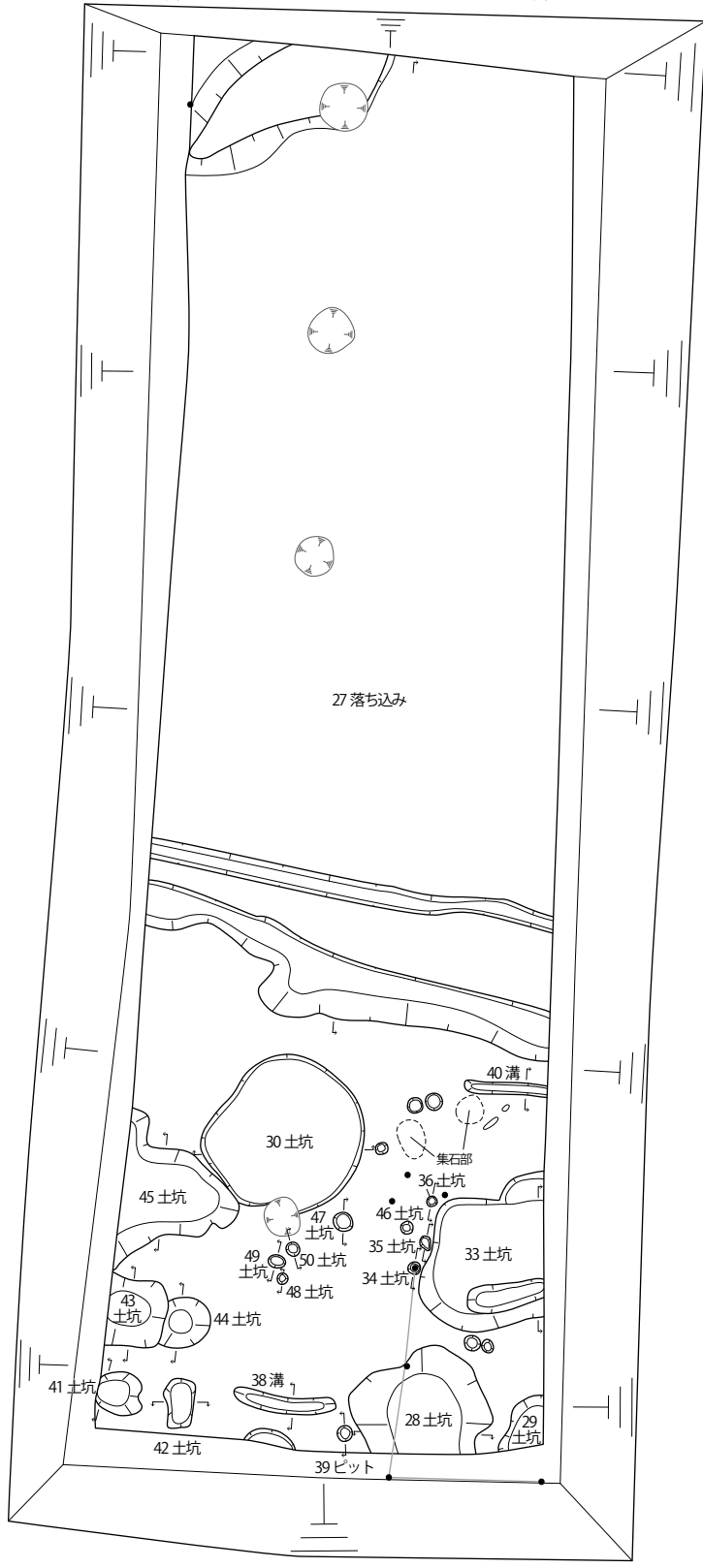


図10 第3面平面図

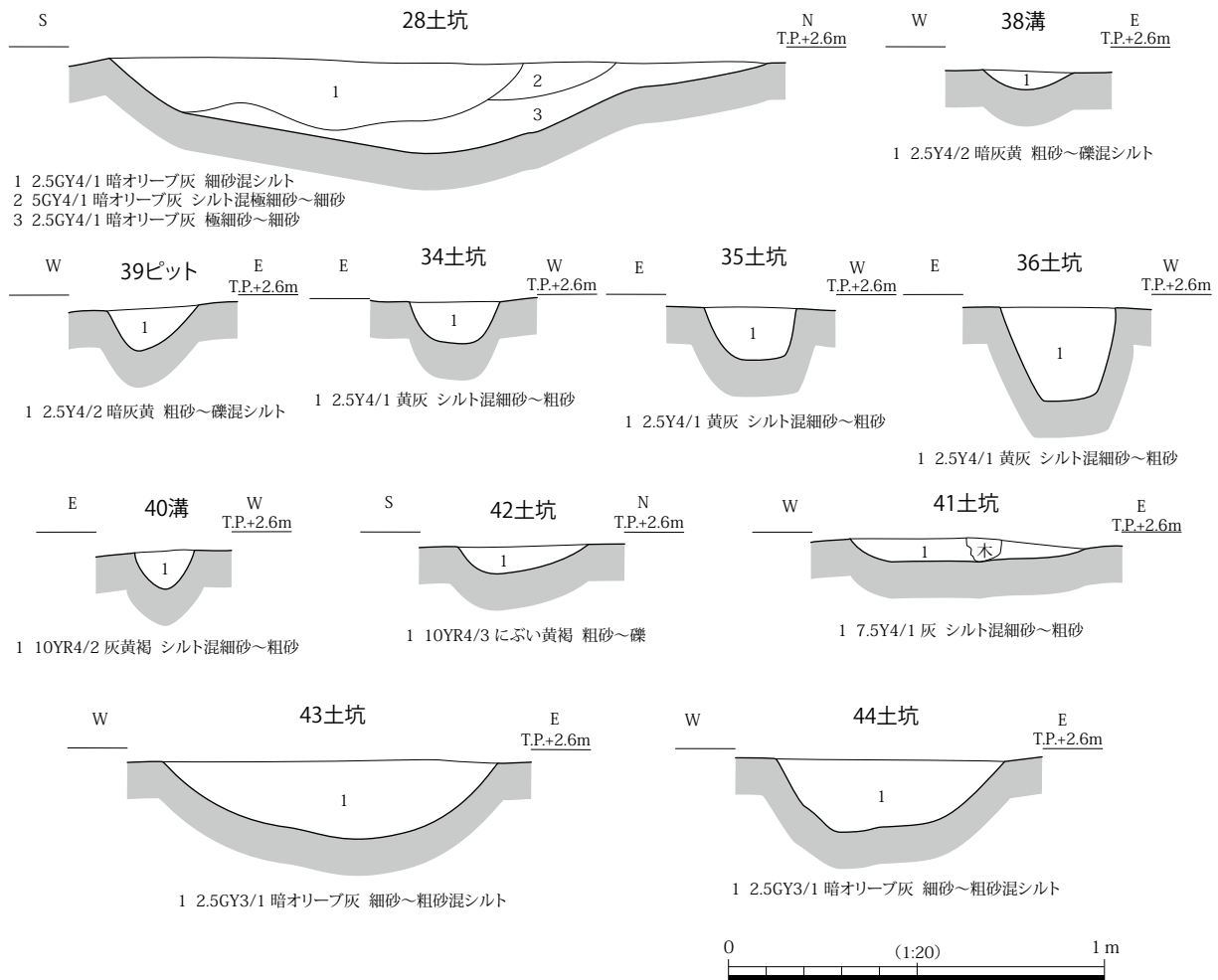


図11 第3面遺構断面図-1

**45 土坑** 調査区の北西部で検出した。大形の不定形の土坑で、北側は調査区より外にのびている。検出長 1.7 m、最大幅 2.2 m、深さ 0.2 mで、断面は皿形を呈する（図 12）。遺物は出土していない。

**47 土坑** 調査区の北西部で検出した。30 土坑の南西にあたる。直径 0.2 m、深さ 0.3 mで、断面は逆台形を呈する（図 12）。中心に柱痕がみられるので、柱穴の可能性もある。遺物は出土していない。

**30 土坑** 調査区の北西部で検出した。大形の円形土坑である。直径 2.0 m、深さ 0.5 mで、断面は逆台形を呈する（図 12、写真図版 3-2）。埋土は砂礫層で、湧水により崩壊しやすい状況にあった。

遺物は瓦器椀や瓦質土器の羽釜や浅型火鉢などが出土した（図 15-36・42～44、写真図版 6-1）。瓦器椀の年代から 14 世紀前半の遺構と捉える。

**33 土坑** 調査区の南西部で検出した。大形の土坑である。南半は調査区の外にある。長径 1.6 m、短径 1.0 m、深さ 0.2～0.3 mで、断面は逆台形を呈する（図 12、写真図版 3-1）。西端は二重底のようにさらに落ち、壁際底から太い自然木が出土した。建物の根柢になる可能性もある。

遺物が多く出土した。瓦器や土師器、瓦質土器、青白磁など種類も器種も様々である（図 15-31～34・41、写真図版 6-4）。瓦器椀の年代から 14 世紀前半の遺構と捉える。

**48 土坑・49 土坑・50 土坑** 調査区の北西部、30 土坑の西で検出した。48 土坑は直径 0.2 m、深さ 0.25 mで、断面は逆台形を呈する（図 12）。瓦器椀が出土している（図 15-37、写真図版 6-4）。49 土坑は直径 0.2 m、深さ 0.25 mで、断面は逆台形を呈する（図 12）。土師器皿が出土している（図

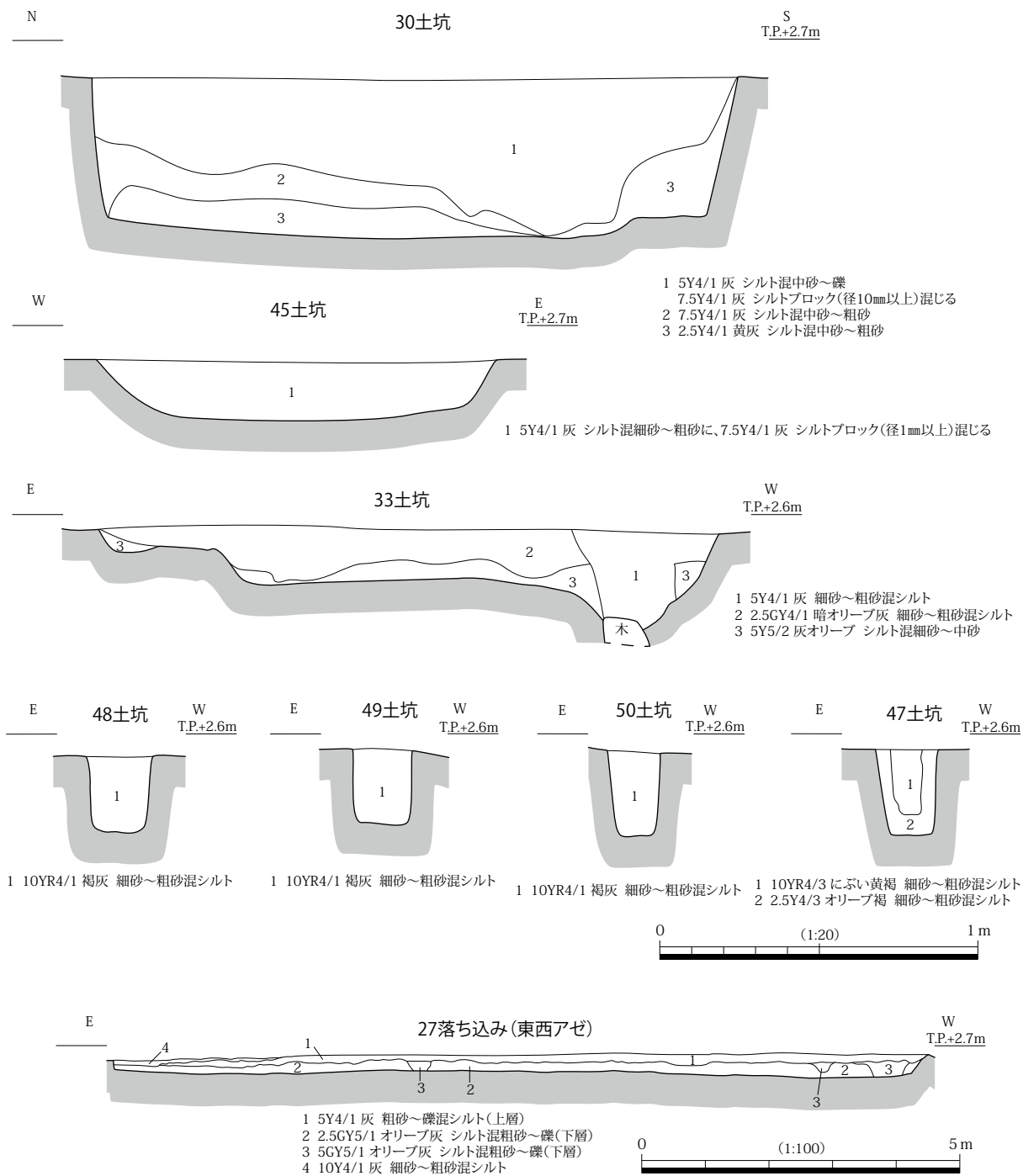


図12 第3面遺構断面図-2

15 - 38、写真図版6 - 4)。50土坑は直径0.15 m、深さ0.3 mで、断面は逆台形を呈する(図12)。遺物は出土していない。47・48・49・50土坑は似た形状、法量を示す。

**集石部** 調査区の南西部、40溝と33土坑の間で拳大の石や土器片が集中してみられる2箇所があった。その範囲はおおよそ直径0.5 mである。下面に掘方等は観察できなかったため、土坑墓等ではないと判断した。34土坑内やその西にある石を連ねて掘立柱建物柱穴列とみると、集石部もその延長上にあり、小さな石を集めて礎盤石とするなど、掘立柱建物に関連する施設とも考えられる。瓦質土器鉢や火鉢が出土している(図15 - 40・45)。

**27落ち込み** 調査区の中央から東端までで検出した。検出長13.0 m、深さ0.3 mをはかる(図

12)。断面は浅い皿形を呈する。砂礫混じりの灰色シルトを埋土とし、遺物を多く含んでいた。北東隅では三角州状に落ち込みが分かれる。また、底面を検出したところ、最低部から南北方向の溝を2、3条検出した。自然流路と判断した。瓦器碗や土師器皿、瓦質土器等が出土している（図16-46～56、写真図版5-2）。

第3面でも西側に集中して大形の土坑や、溝が検出された。中でも30土坑や33土坑からは土師器や瓦器、瓦質土器が多数出土し、より人間が生活していた痕跡が濃厚となった。また、建物は検出できていないが、南西部の土坑内や西壁で東西1.5m、南北2.0m間隔に並ぶ石を検出しており、これらが礎石立柱建物の礎石となる可能性が高い。すると、40溝も建物に付随する排水溝などの可能性もある。東側の落ち込みは14世紀代から15世紀後半までずっと存続し、これまで確認されてきた花屋敷遺跡の集落域東端を画するものとして認識できるのではないだろうか。14世紀前半の遺物が遺構から一定量出土することから、第3面の時期は14世紀前半に求められる。

## 第2節 遺物

(1) 第1面遺構出土遺物（図13-1・2、写真図版6-3）

1と2は第1面の4溝から出土した。

1は瓦質土器深型火鉢で、体部と口縁部が直立してたちあがる。口縁部8分の1残存である。口径41.4cm、残存高10.5cmで、内外面とも灰色を呈する。内外面とも横のナデで仕上げ、装飾はない。立石堅志の奈良火鉢の分類によれば深鉢I類で、15世紀である。

2は軒丸瓦であるが、瓦当部が外れている。残存長14.8cm、最大厚さ4.5cm、凸面は縦のナデ、凹面は布目とナデが残り、瓦当と丸瓦の接合部には接合用の粘土を充填した痕や指オサエ痕が残る。当調査では平瓦、丸瓦以外は、これと11の鳥衾瓦、小片のため掲載していないが雁振瓦が出土している。

(2) 第1層・第2層出土遺物（図13-3～12、写真図版7-1・8-2・8-5）

3と9は第1層から出土した。

3は中央部からの出土で土師器皿である。口径10.4cm、器高2.1cmで、内外面とも橙色を呈する。口縁部はつまみ上げ、全体を指オサエ後ナデで仕上げる。15世紀末か。

9は瓦質土器摺鉢で、10分の1程度残る。口径28.8cm、残存高6.8cmで、内面は灰白色、外面は灰色を呈する。口縁部は断面三角形で、外面は横方向のヘラケズリ、内面は全体に摺目がみられる。15世紀中頃から後半か。

4から8、10から12は第2層から出土した。

4から6は土師器皿である。4は約2分の1残存する。口径10.0cm、器高2.0cmで、内外面ともにぶい黄褐色を呈する。やや深い椀形の器形をとる。15世紀後半である。5は完形である。口径9.2cm、器高2.0cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。形がかなりいびつで、底面には成形の際の細かい筋状痕跡が残る。ヘソ皿で、15世紀後半である。6は約2分の1残存する。口径8.0cm、器高1.9cmで内外面とも灰黄色を呈する。ヘソ皿で、15世紀後半である。

7は瓦質土器鍋で、5分の1程度残存する。口径42.6cm、残存高6.3cmで、内外面とも灰色を呈する。口縁部は底面に水平に横に張り出し、体部外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキである。京都型の瓦質土器で15世紀代か。

8は土師器甕で、口縁部のみ残存する。口径38.0cm、残存高5.1cmで、胎土は粗く、内外面とも浅



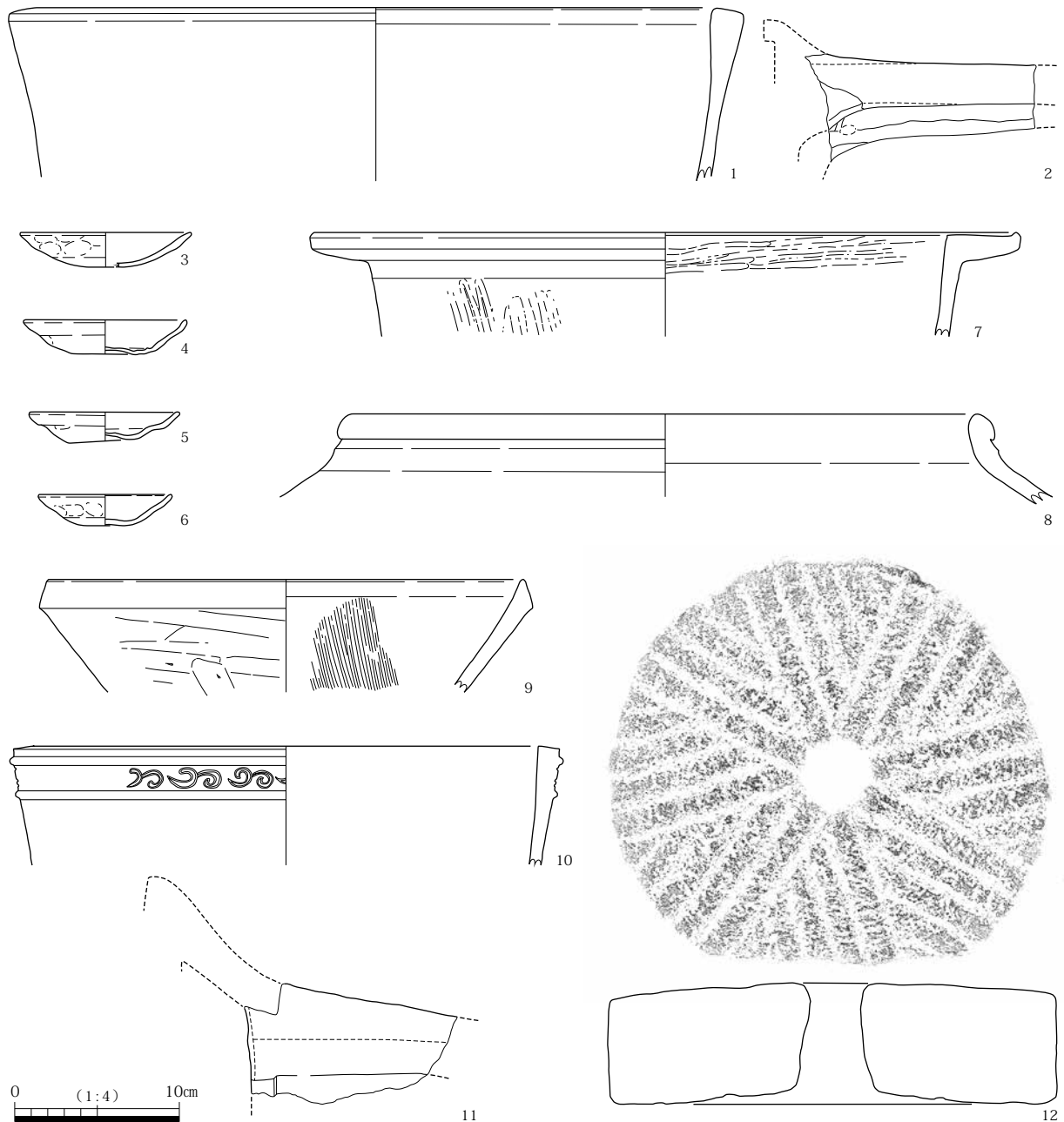


図13 第1面遺構・第1層・第2層出土遺物実測図

黄色を呈する。口縁部は外に丸く巻き、体部外面はタタキである。大阪堺で作られる湊焼である。

10は瓦質土器鉢で、20分の1程度残存する。口径32.2cm、残存高7.3cmで、内外面とも灰色を呈する。口縁端部は平らで桶状の器形をとり、口縁部外面に凸帯を2条めぐらせ、その間に雲文のスタンプを押捺する。おそらく深鉢で、15世紀である。

11は鳥衾瓦である。鳥衾瓦は鬼瓦や棟先の上へのせる瓦で、軒丸瓦の後ろに雁振瓦をつくりつけたものである。残存長13.0cm、最大厚さが5.6cmである。凸面は縦方向の、瓦当部は横方向のナデで仕上げ、凹面は布目圧痕と糸切痕が残る。丸瓦の先端に数mmの段差があるのは、丸瓦の模骨に段差があったことによると思われる。中世のものである。

12は石臼で、わずかに欠ける。直径27.2cm、厚さ7.3cmで中心に直径4.0～5.0cmの芯棒受けの孔をもつ。凝灰岩製で、内面は8分割され、5条1組の摺目をもつ下臼である。外面には石臼を成形

時についたと思われる粗いノミ痕の凹凸が残る。

(3) 第2面遺構出土遺物(図14-13~30、写真図版5-1・6-2・6-3)

13・14は第2面の14溝から出土した。

13は瓦質土器摺鉢で、約3分の1残存する。口径31.6cm、残存高11.3cmで、内面は橙色、外面は灰白色を呈する。体部外面上半は横の、体部下半は縦方向のケズリだがわずかにハケメが認められる。体部内面は横方向のハケを一面に施したのち、摺目を入れる。14世紀前半である。

14は土師器皿で、約3分の2残存する。口径8.3cm、器高1.4cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。底部が盛り上がったヘソ皿で、15世紀中頃である。

15は第2面の18土坑から出土した。土師器皿で、ほぼ完形である。口径8.3cm、器高2.0cmで、外面はにぶい橙色、内面は浅黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀中頃である。

16から22は第2面の13落ち込みから出土した。

16は瓦質土器摺鉢で、片口の部分が残る。口径37.0cm、残存高11.8cmで、底部は欠損する。内外面とも暗灰色を呈する。口縁部は断面三角形で、肥厚せず、体部と底部は直線的につながる。外面は口縁部付近に横の、体部から底部にむかって縦方向のケズリ、内面はナデ後摺目を施す。摺目は8~10本を一つの単位とするようである。15世紀前半である。

17は土師器甕で、口縁部のみ残存する。口径37.4cm、残存高7.2cmで、内外面とも浅黄橙色を呈する。口縁部は外に丸く巻き込み、体部外面はタタキ、内面はハケメである。8と同じく湊焼と思われる。

18から21は土師器皿である。18はほぼ完形である。口径8.3cm、器高2.9cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。底部が薄く、盛り上がったヘソ皿で、15世紀中頃である。

19は約3分の2残存する。口径8.2cm、器高1.8cmで、内外面ともにぶい橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀中頃である。

20はほぼ完形である。口径8.0cm、器高2.1cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部は強いヨコナデにより段をなし、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀後半である。

21は約2分の1残存する。口径9.2cm、器高2.1cmで、内面はにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。口縁端部は丸く、底部も平らで厚い。15世紀前半であろうか。

22は平瓦である。広端部の途中までと、一側面の途中までが残存する。残存長18.5cm、残存最大幅14.8cm、最大厚2.5cm、最小厚2.0cmで、灰色を呈する。凹面の中央にナデ工具の痕跡が残り、広端部に離れ砂が残るのは凹型台に離れ砂を撒いて、その後にナデ調整したためか。側面のケズリは広端から狭端にむかってなされる。

23から30、104から106は第2面の土器溜から出土した。土器溜からはヘソ皿とよばれる土師器皿が20枚以上と、ヘソ皿とやや器形が異なる、底部から口縁部のたちあがり垂直で短い皿が混じって、重なるように出土した。

23は完形である。口径8.0cm、器高1.9cmで、内面はにぶい黄橙色、外面は灰黄色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀後半である。

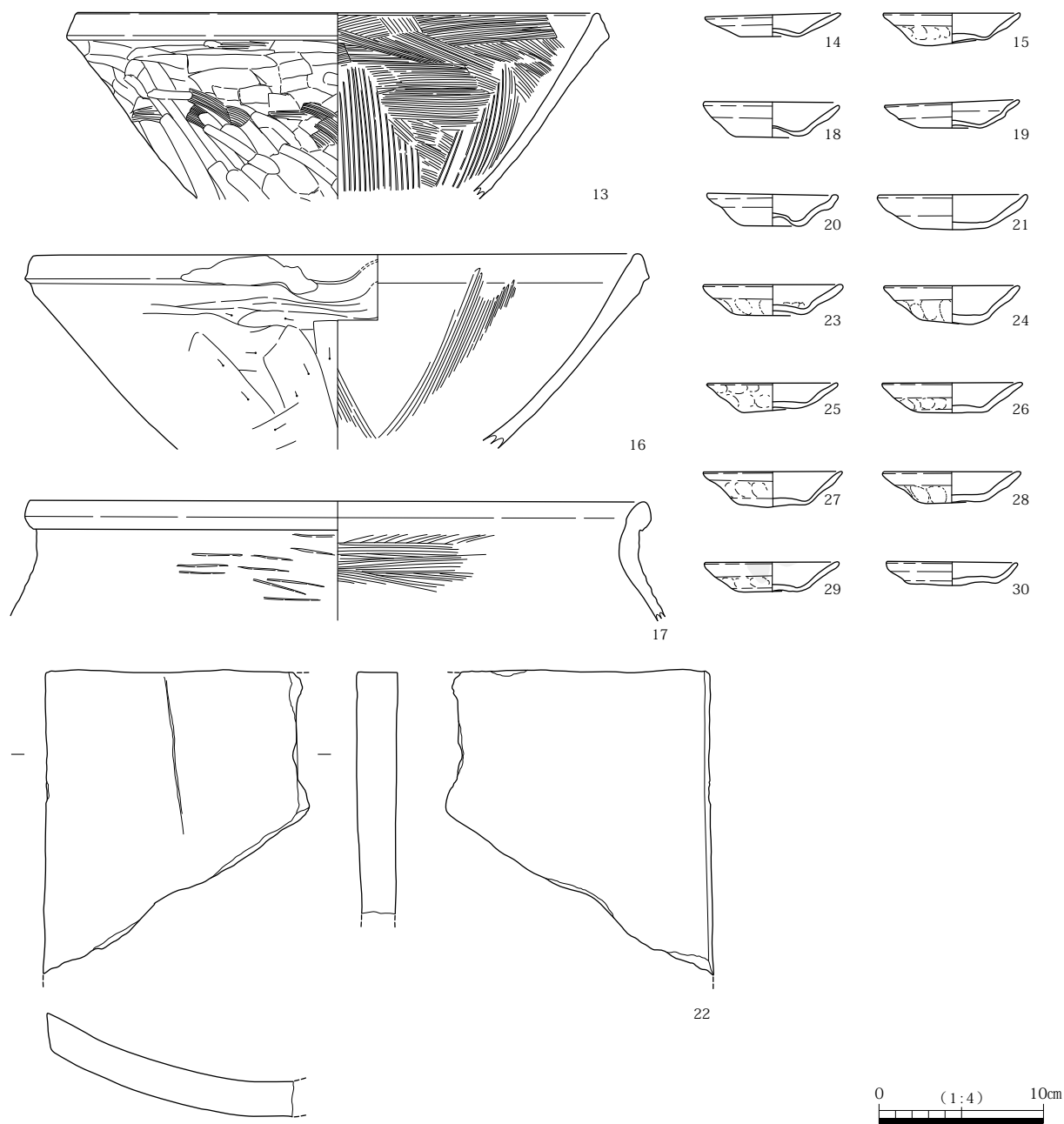


図14 第2面遺構出土遺物実測図

24は完形である。口径8.1cm、器高2.4cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀後半である。

25は完形である。口径7.8cm、器高1.8cmで、内面はにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で15世紀後半である。

26は約3分の2残存する。口径8.4cm、器高2.2cmで、内外面とも灰黄色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は厚く平らで、指オサエ後ナデで仕上げる。15世紀後半である。27は約3分の2残存する。口径8.6cm、器高1.3cmで、内外面とも灰黄色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は厚く平らで、指オサエ後ナデで仕上げる。15世紀後半である。

28は完形である。口径8.2cm、器高1.9cmで、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15世紀後半である。

29 はほぼ完形である。口径 8.1cm、器高 1.8cm で、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。ヘソ皿で、15 世紀後半である。

30 はほぼ完形である。口径 7.8cm、器高 1.4cm で、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。胎土が精良で口縁部が短く、底部から垂直気味にたちあがるタイプの皿で 15 世紀後半である。104 から 106 も土器溜出土の土師器皿で、写真のみ掲載したが、ほぼ同じ器形や法量である（写真図版 6-2）。

（4）第 3 面遺構出土遺物（図 15・16-31～56、写真図版 5-2・6-1・6-4）

31 から 34 と 41 は第 3 面の 33 土坑から出土した。

31 は和泉型の瓦器椀で、口縁部 3 分の 1 弱残存である。口径 10.4cm、残存高 2.8cm で、内外面とも灰色を呈する。高台はなく内面にも暗文が疎らにしかみられないなどの特徴から、14 世紀前半、IV-5 段階のものである。

32・33 は土師器皿である。32 は口縁部 4 分の 1 弱残存である。口径 11.3cm、器高 2.1cm で、内外面とも灰黄色を呈する。底部から口縁部にいったん垂直にたちあがり、その後大きく外に開く。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。14 世紀前半である。

33 は完形である。口径 7.8cm、器高 1.5cm で、内外面ともにぶい灰黄色を呈する。口縁端部は丸くつまみあげ、口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。底部内面にはまだらに炭化物が付着する。14 世紀前半である。

34 は青白磁盒子で、口縁部で 3 分の 1 残存する。口径 6.4cm、器高 2.2cm、底径 4.4cm で、胎土は灰白色、施釉されている箇所は明緑灰色を呈する。型嵌め、型抜きによる成形で、口縁部は姥口、体部には 0.3cm 間隔で長方形のくぼみが入り、底部は幅 0.5cm の輪高台である。施釉が体部外面上半 2 分の 1 にしか施されず、内面も施釉が不十分で所々に露胎があるなど、粗雑なつくりである。青白磁は 13 世紀末から 14 世紀初めによくみられるが、退化した傾向を示すので 14 世紀前半であろうか。

41 は須恵器のこね鉢で、5 分の 1 程度残存する。口径 25.0cm、残存高 7.8cm で、内外面とも灰色を呈する。口縁部は断面三角形で、くの字を呈し、幅 2.0cm と厚く折り返す。内外面とも回転ナデ成形である。14 世紀前半、森田稔編年の III-2 段階である。

35 は第 3 面の 35 土坑から出土した。土師器皿で、口縁部 3 分の 2 弱が残存する。口径 10.7cm、器高 2.6cm、底径 7.8cm で、内外面とも灰白色を呈する。口縁部は大きく外に開き、底部は平らで底部から口縁部は垂直にたちあがる。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。14 世紀後半である。

36 と 42 から 44 は第 3 面の 30 土坑から出土した。

36 は和泉型の瓦器椀で、口縁部 4 分の 1 残存である。口径 10.5cm、残存高 2.7cm で、内外面ともにぶい灰色を呈する。高台はなく、内面にも暗文が一条しかみられないなど、14 世紀前半、和泉型 IV-4 から IV-5 段階である。

42 は瓦質土器羽釜で、口縁部 10 分の 1 残存である。口径 27.0cm、残存高 7.1cm で、内外面とも暗灰色を呈する。口縁部は段をもち、罫とほぼ垂直である。罫より下は煤が付着する。14 世紀末から 15 世紀前半である。

43 は瓦質土器浅型火鉢で、口縁部 10 分の 1 残存である。口径 36.8cm、底径 31.4cm、残存高 14.8cm で、内外面とも灰色を呈する。型成形で、体部は輪花状に凹凸がつくが、おそらく八弁である。

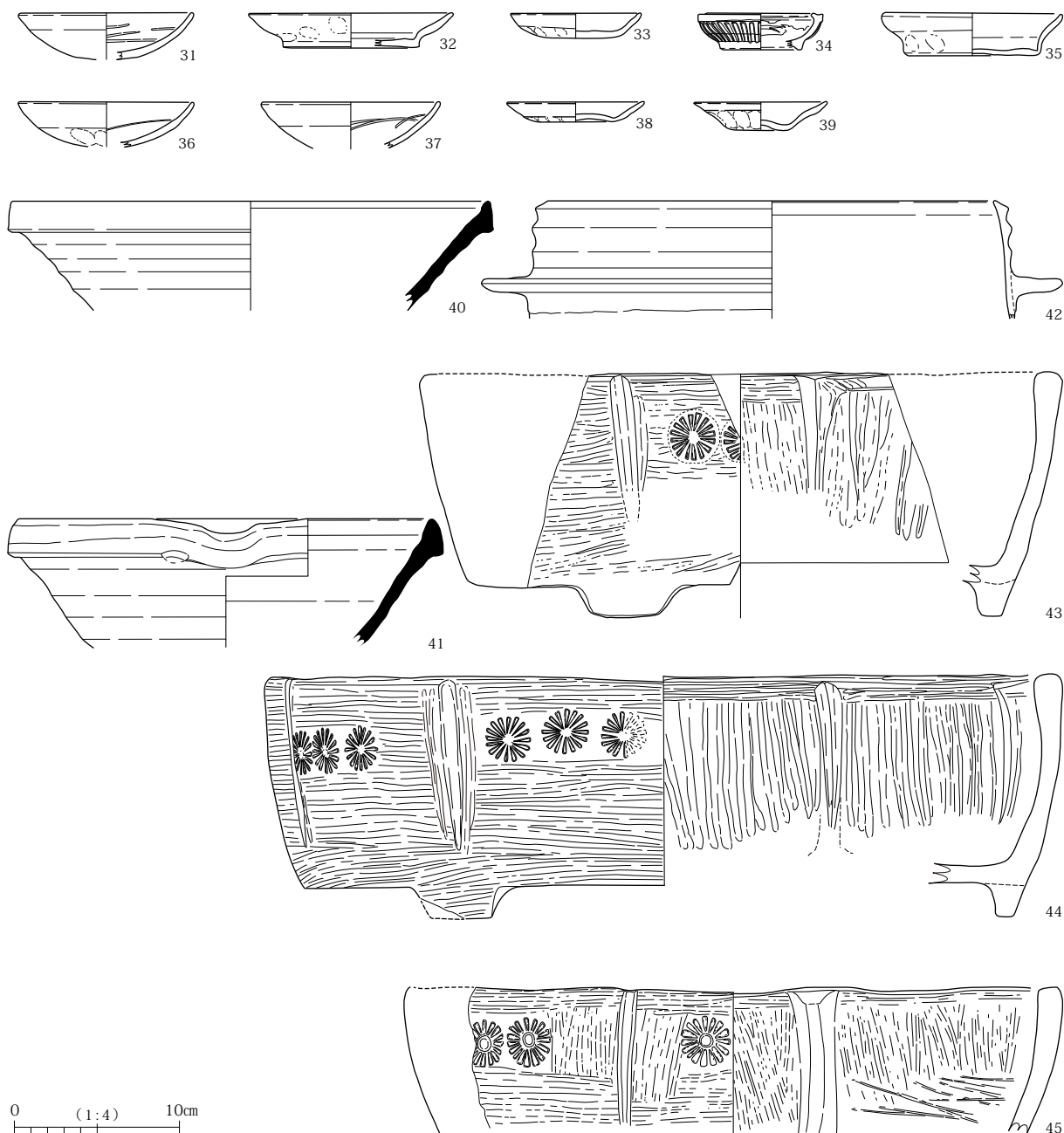


図 15 第 3 面遺構出土遺物実測図 - 1

底部には 3 か所に長方形の脚がつく。内面は縦方向のミガキ、外面は横方向のミガキとスタンプによる 3 個 1 対の菊花文を施す。浅鉢 I 類で、14 世紀前半である。

44 は瓦質土器浅型火鉢で、口縁部 10 分の 2 残存である。口径 47.4cm、残存高 14.7cm で、内外面とも灰色を呈する。型成形で、体部は輪花状に凹凸がつくが、八弁である。底部には 3 箇所に長方形の脚がつく。内面は縦方向のミガキ、外面は横方向のミガキとスタンプによる 3 個 1 対の菊花文を施す。浅鉢 I 類で、14 世紀前半である。

37 は第 3 面の 48 土坑から出土した。和泉型の瓦器椀で、口縁部 4 分の 1 強残存である。口径 10.7cm、残存高 2.8cm で、内外面とも灰色を呈する。高台はなく、内面にも暗文が疎らにしかみられないなど、14 世紀前半、IV - 5 段階である。

38 は第 3 面の 49 土坑から出土した。土師器皿で、口縁部 3 分の 1 強が残存する。口径 8.2cm、器

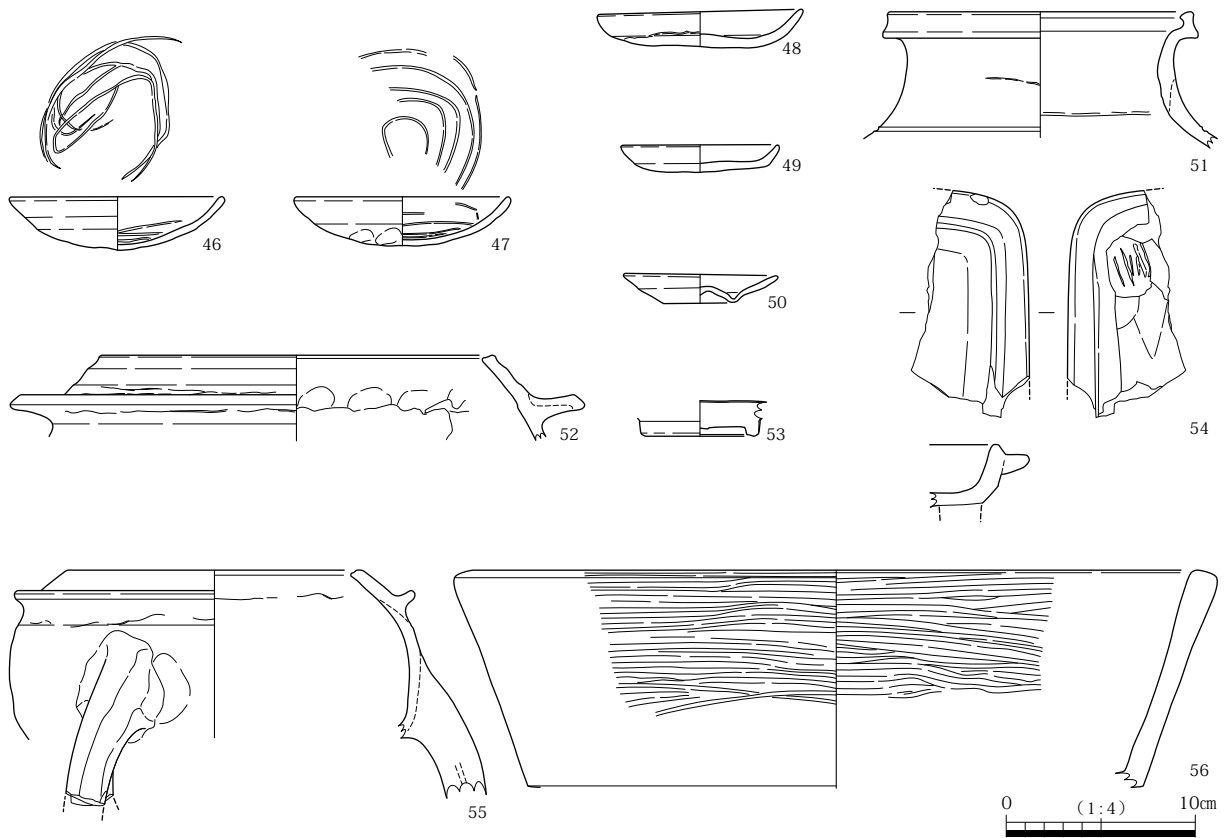


図16 第3面遺構出土遺物実測図-2

高 1.2cm で、内外面とも灰黄色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエ後ナデで仕上げる。14 世紀前半である。

39 は第 3 面の 36 土坑から出土した。土師器皿で約 2 分の 1 が残存する。口径 8.0cm、器高 1.7cm で、内面は灰白色、外面は浅黄色を呈する。口縁部はヨコナデ、底面は強い指オサエ後ナデで仕上げる。14 世紀前半である。

40 は第 3 面の南集石部から出土した。須恵器のこね鉢で、10 分の 1 程度残存する。口径 28.8cm、残存高 6.6cm で、内外面とも灰色を呈する。口縁部は厚く折り返し、自然釉がかかる。内外面とも回転ナデ成形である。14 世紀前半、Ⅲ-2 段階である。

45 は第 3 面の北集石部から出土した。瓦質土器浅型火鉢で、口縁部 10 分の 1 残存である。口径 39.4cm、残存高 8.8cm で、内外面とも灰色を呈する。型づくりで、体部は円形に成形後、棒やヘラを押し当て輪花状にしており、輪花はおそらく八弁である。底部は欠損する。内面は縦方向のミガキ、外面は横方向のミガキとスタンプによる菊花文が 1 個みられる。浅鉢 I 類で、14 世紀前半である。

43 から 45 はいずれもスタンプや法量が異なり別個体であるが、似た形状を示す。44 も 41・42 と同様の規格品、量産品と思われ、スタンプも本来は 3 個 1 対で、底部には脚を有するだろう。

46 から 56 は東半の 27 落ち込みから出土した。

46 は瓦器碗で、ほぼ完形である。口径 11.1cm、器高 2.8cm で、内外面とも灰色を呈する。高台はなく、内面見込みに乱れたらせん状の暗文が描かれる。和泉型Ⅳ-4 段階、14 世紀前半である。

47 は瓦器碗で、約 2 分の 1 残存する。口径 11.1cm、器高 2.6cm で、内外面とも灰色から灰白色を呈する。高台はなく、内面見込みに 5 条の圏線の暗文が描かれる。和泉型Ⅳ-4 段階、14 世紀前半で

ある。

48は土師器大皿で、完形である。口径10.8cm、器高2.0cmで、内面は灰色、外面は灰白色を呈する。全体に厚く、精良なつくりで14世紀前半である。

49は土師器皿で、ほぼ完形である。口径8.4cm、器高1.5cmで、内外面とも明オリーブ灰色を呈する。口縁部をつまみあげ、全体に厚い。14世紀前半である。

50は土師器皿で、完形である。口径8.2cm、器高1.8cmで、内面は灰オリーブ色、外面は灰白色を呈する。器壁が薄いヘソ皿で、14世紀前半である。

51は陶器甕口縁部である。口径16.0cm、残存高7.2cmで、口縁部は直立気味にたちあがり、受口を呈する。口縁部と頸部の境目に沈線をもつ。備前焼である。

52は瓦質土器羽釜で、口縁部から齔部がわずかに残存する。口径20.7cm、残存高4.5cmで、内外面とも灰色を呈する。口縁部は2つの段をもち、齔の接合部は内外面に粘土紐痕と内面は指オサエの痕が残る。齔から下には煤が付着する。15世紀代である。

53は磁器碗底部である。底径5.7cm、残存高1.9cmで、灰色の素地に灰オリーブ色の釉薬がかかる。高台が削り出しで底部が厚い、龍泉窯系青磁碗だが、見込みは無文である。14世紀代か。

54は瓦質土器盤で、残存長11.8cm、幅6.3cm、残存高3.3cmである。長方形の硯のような容器に脚がついたものだが、足は底面に接合痕を残し欠損する。口縁部から0.5cm下がったところに1.5cm幅の縁が四周を囲むように付く。全体をナデで仕上げる。

55は瓦質土器三足釜で、3分の1弱残存する。底部と脚の途中から欠損する。口径15.2cm、残存高9.1cmで、内外面とも灰色を呈する。口縁部は短く内傾し、齔部は短く水平より上向きである。体部はやや下膨れの球形で3本の足がつく。体部内外面ともナデで、外面は全体に煤が付着する。瓦質土器三足釜は13世紀から14世紀にみられるので、14世紀代の製品であろう。

56は瓦質土器浅型火鉢で、体部と口縁部が直立してたちあがり、底部から脚部は欠損する。口径40.3cm、残存高11.5cmで、内外面とも灰褐色を呈する。内外面とも横方向のナデとミガキで仕上げ、装飾はない。浅鉢Ⅱ類で、14世紀後半である。

(5) 第3層出土遺物(図17・18-57~80・82・83、写真図版7-2・8-1)

57は瓦質土器小形鉢で、約5分の1残存する。口径14.8cm、器高5.2cmで、内外面とも灰色を呈する。口縁部から底部への傾斜は直線的で、体部外面は板ナデ、内面はナデ、口縁部に煤が付着する。東播系須恵器の鉢を模した器形である。14世紀後半から15世紀前半か。

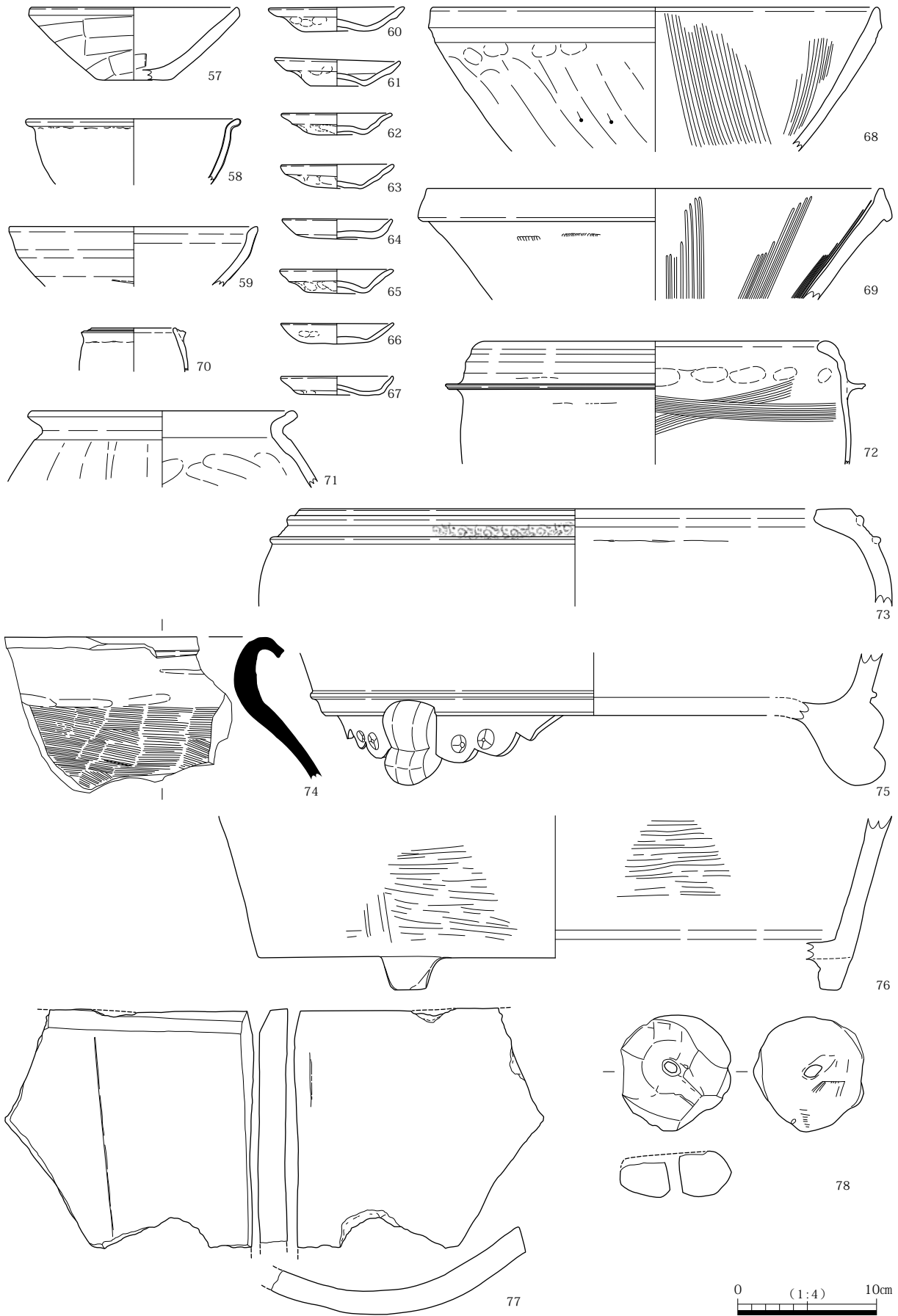
58は磁器碗で、約6分の1残存する。口径15.1cm、残存高4.7cmで、内外面とも灰白色で施釉されるが、胎土は灰白色から橙色である。口縁端部は丸く、つまみ上げ外に開く。全体に粗雑な作りで、施釉にもムラがあり発色が悪いが、龍泉窯系の青磁碗で15世紀の製品である。

59は西半から出土した。陶器平碗で体部下半から底部は欠損する。口径17.7cm、残存高4.3cmで、内外面とも浅黄色の釉薬がかかるが、体部下半は露胎である。瀬戸焼で、藤沢分類の後期Ⅲ類、15世紀第二四半期である。

60から67は土師器皿である。60は完形である。口径9.8cm、器高1.8cmで、内外面ともにぶい橙色を呈する。底部は厚く盛り上がるヘソ皿で、15世紀中頃から後半である。

61は完形のヘソ皿である。口径9.0cm、器高2.1cm、内外面とも浅黄色を呈する。15世紀後半である。

62はほぼ完形のヘソ皿である。口径7.8cm、器高1.6cmで、内外面とも灰黄色を呈する。15世紀



0 (1:4) 10cm

图 17 第 3 层出土遗物实测图



後半である。

63 はヘソ皿で約 5 分の 4 残存する。口径 10.0cm、器高 1.8cm で、内外面とも橙色を呈する。15 世紀後半である。

64 は完形のヘソ皿である。口径 7.8cm、器高 1.9cm で内外面とも灰白色を呈する。15 世紀後半である。

65 は完形のヘソ皿である。口径 7.9cm、器高 1.7cm で内外面とも灰黄色を呈する。15 世紀後半である。

66 はほぼ完形である。口径 8.2cm、器高 1.4cm で、内外面とも浅黄色を呈する。底部は厚く、底面に板ナデの痕跡残る。14 世紀後半である。

67 は約 5 分の 4 残存する。口径 8.0cm、器高 1.3cm で内外面とも灰黄色を呈する。14 世紀後半である。

68 は瓦質土器摺鉢で、約 6 分の 1 残存する。口径 32.0cm、残存高 10.3cm で、内外面とも灰色を呈し、口縁部は肥厚せず、体部が深い器形をとる。体部外面は指オサエの後ケズリ、内面はかなり摩滅するが、10 条 1 対の摺目がみられる。14 世紀後半である。

69 は陶器摺鉢で、口径 32.6cm、残存高 8.0cm で、外面は黄灰色、内面は暗灰色を呈する。回転ナデ成形で、内面は 8 条 1 対の筋目がみられる。備前焼で鎌倉時代中期、13 世紀である。

71 は土師器羽釜で、口縁部のみである。口径 18.8cm、残存高 5.5cm で、内外面とも橙色を呈する。口縁部は短く、内側に丸く巻き込み、体部外面は板ナデ、内面は未調整で指オサエが残る。13 世紀末から 14 世紀前葉か。

72 は瓦質土器羽釜で、口径 35.0cm、残存高 8.8cm で、外面は浅黄色、内面は灰黄色を呈する。口縁部は内側に巻き込み、段をもち、鏝部は短く、体部は垂直な器形を呈する。体部外面はナデ、内面は横のハケで、土師器にみえるが燻し焼成が不十分なためである。大和からの搬入品で、15 世紀代後半である。

70 は瓦質土器ミニチュア三足釜で、口径 6.1cm、残存高 3.1cm で、内外面とも灰色を呈する。

73・75・76 はいずれも東部から出土した瓦質土器浅型火鉢である。

73 は口縁部のみ残存する。口径 31.6cm、残存高 7.0cm で、内外面とも灰色を呈する。口縁端部は平らで、体部は内湾する。口縁部外面に凸帯を 2 条めぐらせ、その間に S 字状文のような文様のスタンプを押捺する。浅鉢 V 類で、75 のような脚部がつくと思われる。15 世紀前半である。

75 は底部から脚部のみ残存する。底径 38.0cm、残存高 9.5cm で、内外面とも灰色を呈する。内面はナデ、外面は横のミガキがみられる。金属製品を模したような獣脚を持つ浅鉢 V 類か。15 世紀前半である。

76 は底部から脚部のみ残存する。底径 40.4cm、残存高 9.5cm で、内外面とも灰色を呈する。内外面に横方向のミガキがみられる。口縁部が斜めに伸びる浅鉢 II 類か。74 より古く、14 世紀後半である。第 3 層からは 73・75・76 のほかに、体部が内湾し、口縁端部が丸みをもつ浅鉢 III 類も出土している。

74 は須恵器甕である。口縁部がわずかのため、径を復元できず、残存高は 11.2cm である。口縁端部は平らで、外面には横のタタキ、内面は横のハケメである。

77 は平瓦である。広端部の途中までと、一側面の途中までが残存する。残存長 18.0cm、残存最大幅 14.8cm、厚さ 2.0cm で、灰色を呈する。側縁部はケズリで面取りを、凸面と凹面はナデを施す。凹面の中央に工具でナデを施して最後に止めた痕跡が残る。

78 は土製品で、厚みのある素焼きの円盤の中心に孔を開けている。直径 7.9～8.3cm、厚さ 3.1cm、孔は直径 0.9cm で、にぶい橙色を呈する。上面は剥離するが、成形に布かハケでなでた痕跡が残る。

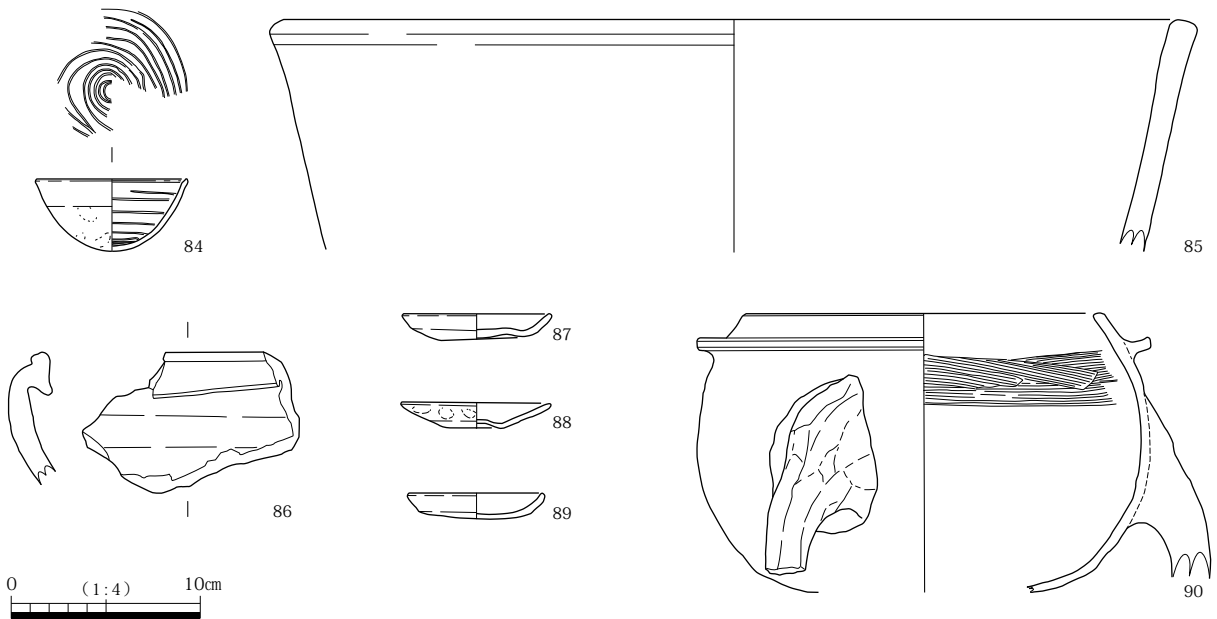
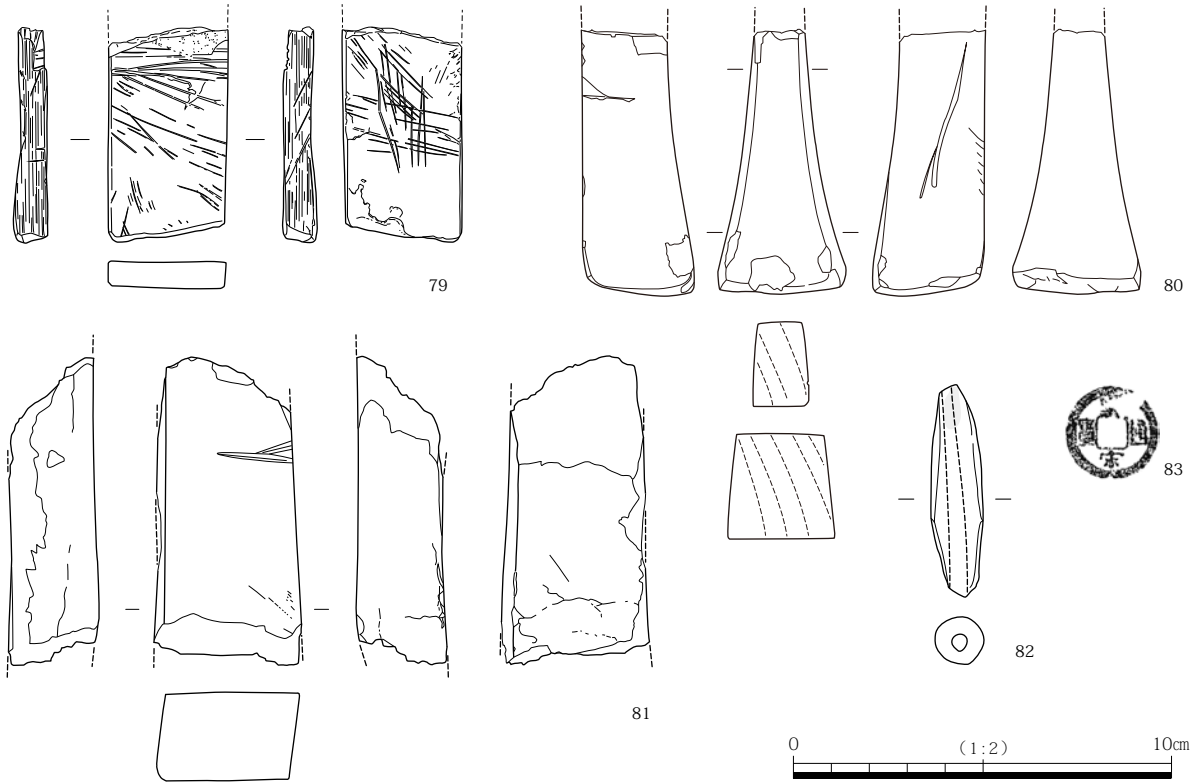


図18 第3層・第4層出土遺物実測図

堺市日置荘遺跡で瓦質製品であるが、室町時代の灯明台が出土しており、形状が似ていることから78は灯明台で、中心に棒状のものを刺して使用したと推測する。花屋敷遺跡06-1-1区第5面80溝から類似した土製品が出土しており、ここでは紡錘車か土錘と報告されている。

79は西側溝で出土した砥石で一端を欠損する。残存長5.7cm、幅3.1cm、厚さ0.7cmである。表裏面は灰白色だが内面は明褐灰色で、表裏面と側面すべてに刃物などの先端を整えた線状痕が明瞭に残る。目の細かい珪質頁岩で、仕上げ砥石と思われる。

80は南西部で出土した砥石で一端を欠損する。残存長7.0cm、狭小部の幅1.2cm、厚さ2.2cm、最

大部の幅 3.0cm、厚さ 2.8cm である。一側面には切削痕や斜め方向の傷が残る。凝灰岩質の砂岩粗砥で、石目のクリーム色と褐色の縞模様が熊本県天草地域で採れる「天草砥」に酷似することから、おそらく搬入品と考えられる。

82 は西部から出土した土錘で、長さ 5.6cm、最大径 1.4cm で、中心よりやや下左寄りに直径 0.5cm の穴を穿つ。

83 は西側溝で出土した銅銭で一端を欠損する。直径 2.4cm、厚さ 0.15cm である。北宋銭の皇宋通宝で 1038 年初鑄であるが、日本では多く流通する。10 - 1 - 9 区調査で発見された銭貨埋納遺構にも約 2,100 枚含まれていた。

(6) 第 4 層出土遺物 (図 18 - 81・84 ~ 90、写真図版 7 - 2・8 - 1)

81 は西部で出土した砥石で両端を欠損する。残存長 8.1cm、最大幅 3.6cm、厚さ 2.4cm である。欠損箇所が多く、刻目が部分的にみられる。石質がきめ細かく整っており手触りも滑らかで、熊本県天草地域の備水砥びんすいに似る。

84 は瓦器小椀で、約 4 分の 1 残存する。口径 7.9cm、器高 3.8cm で、内外面とも灰色を呈する。口径に比して深い器形をとり、器壁は薄い。内面見込みに円弧に沿って 13 条の圏線の暗文が描かれる。和泉型 IV - 4 段階、14 世紀前半である。

85 は西部から出土した瓦質土器深型火鉢で、体部と口縁部が直立してたちあがる。口径 49.0cm、残存高 12.2cm で、内外面とも灰色を呈する。内外面とも横方向のナデで仕上げ、装飾はない。深鉢 I 類で 15 世紀である。

86 は陶器甕で、口縁部の小片のため、口径を復元できなかった。口縁部を外に折り返し、頸部にはへうで 2 条の沈線が入る。内外面とも黒褐色を呈し、細かい白色砂粒を含む。13 世紀代の備前焼か。

87 から 89 は土師器皿である。87 は完形である。口径 7.7cm、器高 1.4cm で、内外面とも浅黄色を呈する。器壁が厚く、14 世紀前半である。

88 は完形である。口径 7.7cm、器高 1.4cm で、内外面とも浅黄色を呈する。器壁が薄く、底部が盛り上がる。14 世紀前半である。

89 は完形である。口径 7.0cm、器高 1.4cm で、内外面とも浅黄色を呈する。器壁が薄く胎土が精良で、口縁部が短くたちあがる、へソ皿と併行して出土する皿である。14 世紀前半か。

90 は西半から出土した瓦質土器三足釜で、約 5 分の 1 残存する。脚の途中から欠損する。口径 18.8cm、残存高 14.7cm で、内外面とも灰色を呈する。口縁部は短く、罅部は短く水平より上向きである。体部はやや下膨れの球形で 3 本の足がつく。体部内面上半は横のハケ、体部外面はナデで全体に煤が付着する。14 世紀前半であろう。

写真のみ掲載した遺物が 16 点ある。

91 は第 1 層もしくは第 2 層からの出土で、陶器ミニチュア壺の口縁部である (写真図版 7 - 1)。短く外反する口縁部と口縁部から約 1.0cm 下に短い突帯をもつ。明黄褐色で、胎土は精良、白色砂粒を多く含む。胎土と色調から常滑など東海系陶器と推測する。

94 は国産陶器、92・93・95 から 101 は輸入陶磁器で、92・93・95 から 98 が青磁、99 から 101 が白磁である (写真図版 7 - 3)。93 は第 1 面の 1 溝、100 は第 3 面の 28 土坑からの出土で、それ以外は第 2 層もしくは第 3 層から出土した。ほとんどが小片で実測不能だったため、写真のみ掲載した。

94 は 29 と同じ瀬戸焼平椀の体部である。下半は施釉されず、露胎であり、内面見込みは重ね痕か、

釉の癒着痕がみられる。

92 は龍泉窯系青磁碗で体部である。鎬蓮弁文である。釉葉が 93 より濃い緑色を呈する。

93 は龍泉窯系青磁碗で口縁部である。鎬蓮弁文で 13 世紀前半代である。

95 は龍泉窯系青磁碗で体部である。

96 は龍泉窯系青磁碗で口縁部である。外面に細かい陰刻の櫛描文が入る。92・93 より新しい。

97 は龍泉窯系青磁碗で底部である。高台径が 3.8cm で小碗である。内面見込みに劃花文はみられない。

98 は龍泉窯系青磁碗でごく小片だが、口縁部である。外面に細かい陰刻の花弁文が入る。

99 は白磁皿で口縁部である。口縁部から体部にかけては曲線的で浅い椀器形をもつ。15 世紀前半である。

100 は白磁皿である。口縁部は端反りで、釉がかき取られた口剥げになっている。15 世紀中頃か。第 3 面の遺構の時期として合わないので、混入の可能性がある。

101 は白磁皿である。口縁部は端反りで、釉がかき取られた口剥げになっている。15 世紀中頃か。

102・103 は石製品である（写真図版 8－1）。102 は中央部の第 1 層から第 2 層の間で出土した。102 は六角形の柱状節理を利用した材で、上下端を欠損する。残存長 7.0cm、最大幅 10.0cm、厚さ 6.5cm の安山岩製である。

103 は砥石である。一研磨面に深くぼみをもち、その裏面も使い込まれていて端から中心にむかって摩滅する。最大長約 17.0cm、最大幅 8.0cm、厚さ 3.5cm で絹雲母片岩製である。

104 から 106 は第 2 面の土器溜から出土した土師器皿で、完形品である（写真図版 6－2）。土器溜から出土した他の土師器皿（図 14－22～30）と同器形、同時期のものである。

#### 〈第 4 章の参考文献〉

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要 第 3 号』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

鋤柄俊夫 1994 「第 2 章 平安京出土土師器の諸問題」『古代学研究所研究報告第 4 輯 平安京出土土器の研究』 財団法人古代学協会

千喜良淳 2002 「中・南河内における土師器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第 46・47－1・2 次発掘調査報告書』 東大阪市教育委員会

奥井智子「畿内における土製煮炊具の様相」2007 『中近世土器の基礎研究 21 土製煮炊具の諸様相』 日本中世土器研究会編 真陽社

日本中世土器研究会編 2008 『第 27 回 中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着』 真陽社

佐藤垂星 2009 「輪花形火鉢の諸問題」『中近世土器の基礎研究 22 瓦質土器の出現と定着』 日本中世土器研究会編 真陽社

立石堅志 2009 「奈良・京都における瓦質土器出現の様相」『中近世土器の基礎研究 22 瓦質土器の出現と定着』 日本中世土器研究会編 真陽社

財団法人大阪府文化財センター 大阪府教育委員会 大阪府立泉北考古資料館 1989 『第 2 回 発掘速報展 一堺市日置荘・福田・小阪遺跡一』

## 第5章 総括

以上、花屋敷遺跡の調査成果についてみてきたが、最後にこれまでの調査成果ともあわせて整理しておく。

遺構は、土坑や溝、落ち込み等を検出した。掘立柱建物等の明確な居住を示す遺構は検出できなかったが、第3面で建物の礎石となるような石列を検出したことや、包含層中に摩耗せずに器形を復元できるような遺物を多く含み、包含層が細かい単位で分層できる整地土層となっていることは、この周辺一帯に人が生活していたことを示している。

また、今回の調査区は西側約3分の1に遺構が集中し、それより東は東にいくほど落ち込む様相を呈し、この落ち込みからは一定量の遺物が出土するものの、これより東では遺構はみられないことが特徴としてあげられる。

既往の調査では、06-1-1区・06-2-3区・10-1-9区の西端、06-2-2区の西端、06-2-2区の東端と06-2-1区の西端にかかる部分で区画の役割を果たす南北溝を検出し、それぞれの溝の間は居住域であるが、06-2-1区西端区画溝より東は水田域と認識されている(図3、『瓜生堂遺跡4 岩田遺跡2 花屋敷遺跡3』第191図参照)。当調査区(17-1-1区)は居住域の中に位置するが、西に居住域、東に落ち込みが混在していることから、落ち込みが居住域の東端になっているといえる。

06-1-1区第5面では、調査区南半を占めて東西に広がる80溝を検出し、ここから大量の土器や木製品が出土している。他の溝が南北方向で整然としているのに対し、80溝は東西に広がる溝で区画溝となるかは不明確である。80溝を南に延長すると17-1-1区で検出した13落ち込み、27落ち込みにつながる。また、13落ち込みや27落ち込み出土遺物に木製品はみられないという違いはあるが、80溝出土土器と器種や時期、個体としても非常に似ているものが含まれる。よって、80溝の続きが13落ち込み・27落ち込みとなる可能性が高い。

第1面と第2面から出土した遺物は15世紀中頃から後半、第3面から出土した遺物は14世紀前半に限定されることが判明した。よって、当調査区の居住域は、14世紀前半、15世紀中頃から後半に利用され、15世紀後半には廃絶したと考えられる。

出土遺物の内容からみると、輸入陶磁器をわずかに含むもののいずれも小片で、それ以外は土師器、瓦器、瓦質土器等普遍的にみられる器種構成であることも判明した。つまり、花屋敷遺跡で今回検出された居住域は、農村等の一般的な集落であった可能性が高い。

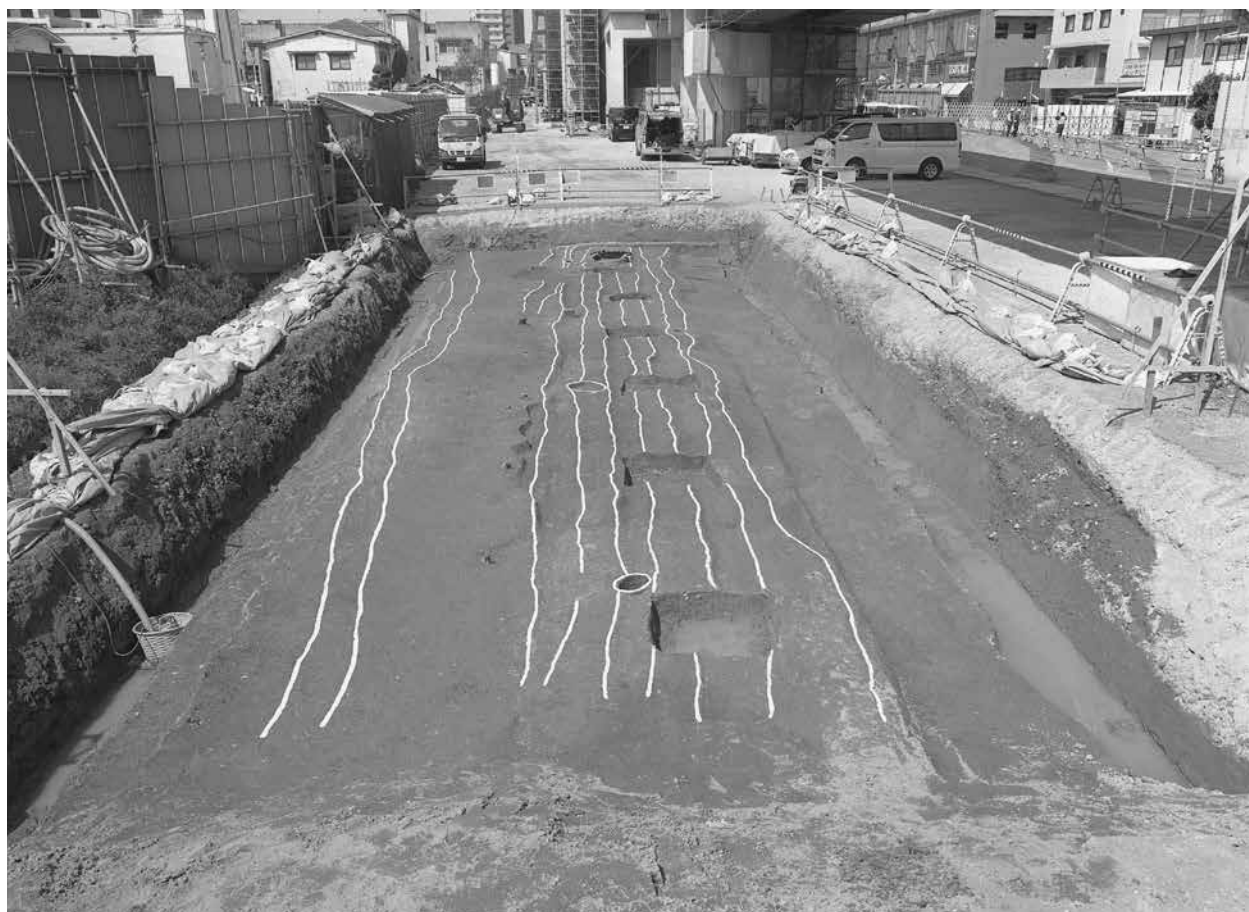
今回の調査では、前回検出された銭貨埋納遺構などの特殊な遺構、遺物はみつかっていないが、これまでの調査成果を補強する調査成果となった。

# 写真図版





1. 第1面全景（北西から）



2. 第1面全景（東から）



## 写真図版 2



1. 第2面全景（西から）



2. 第2面噴砂検出状況（北東から）



3. 西壁断面（東から）



1. 第3面全景（西から）



2. 第3面全景（東から）

写真図版 4



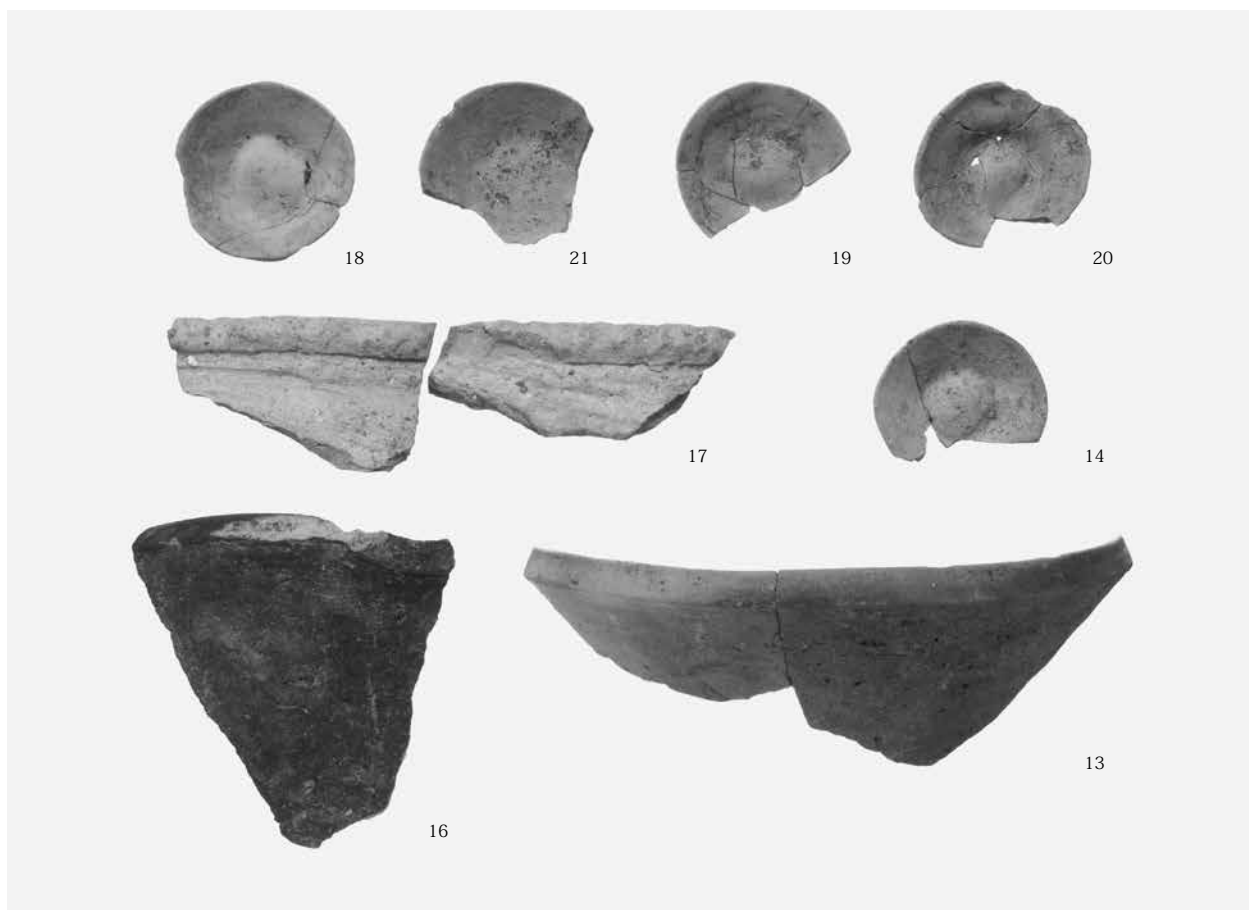
1. 第3面 33土坑・集石部（北東から）



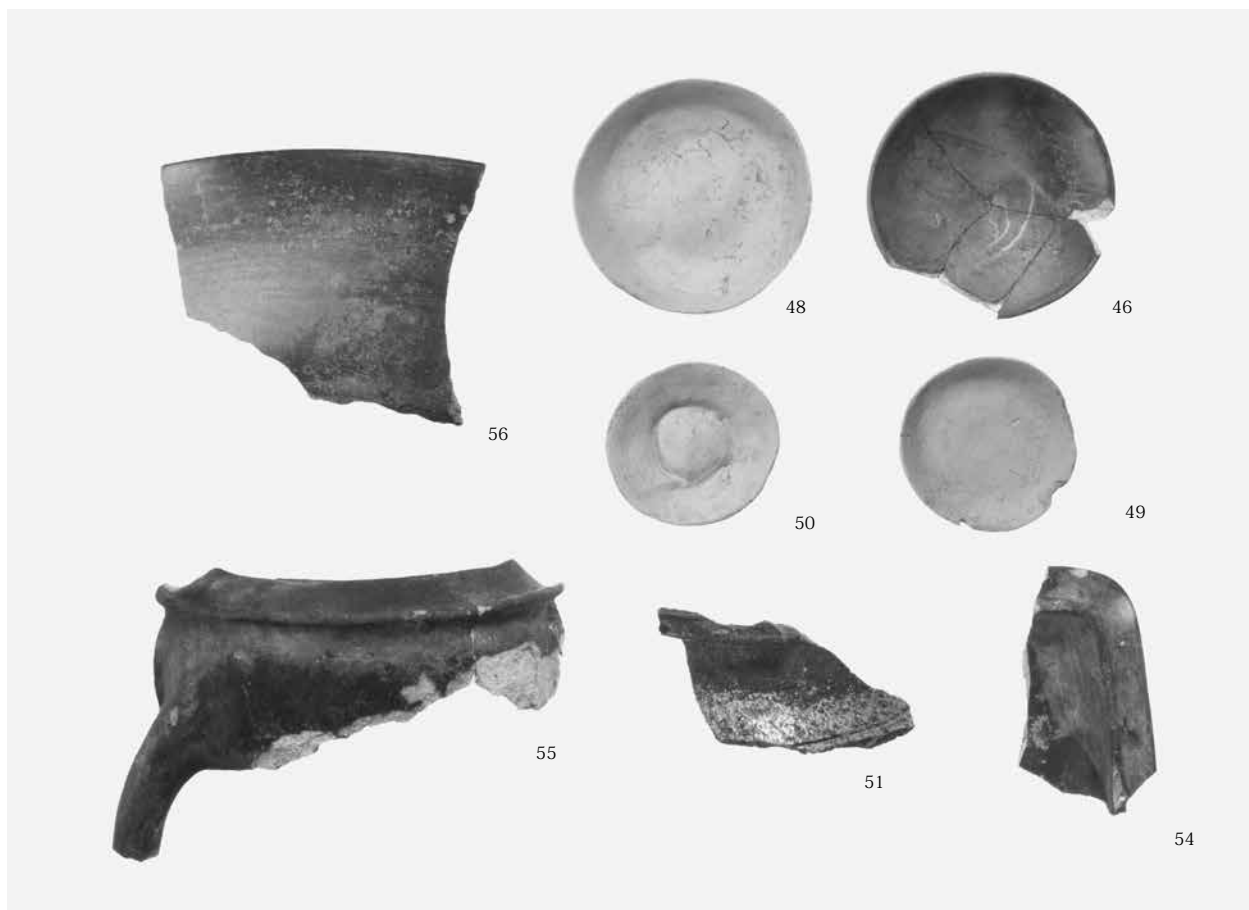
2. 第3面 30土坑・45土坑（西から）



3. 第3面 27落ち込み西側（北から）

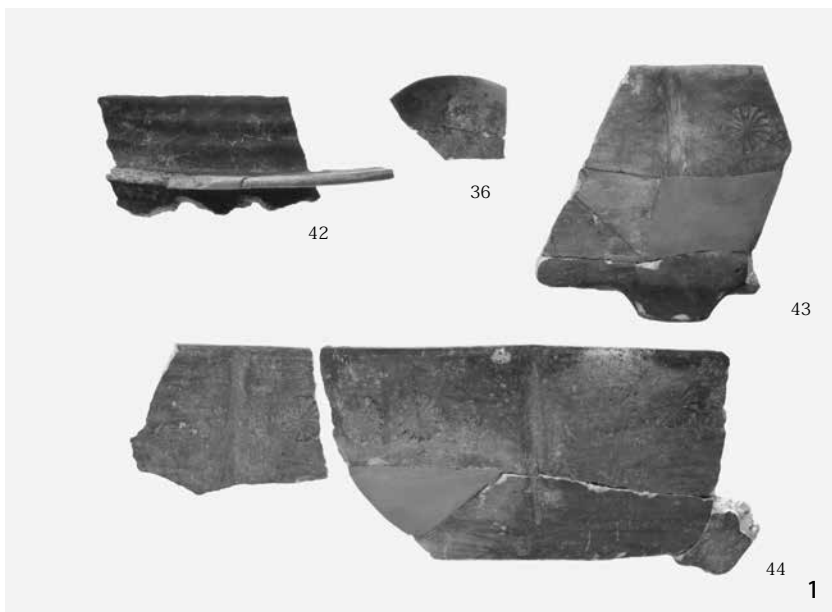


1. 第2面 13 落ち込み・14 溝出土土器

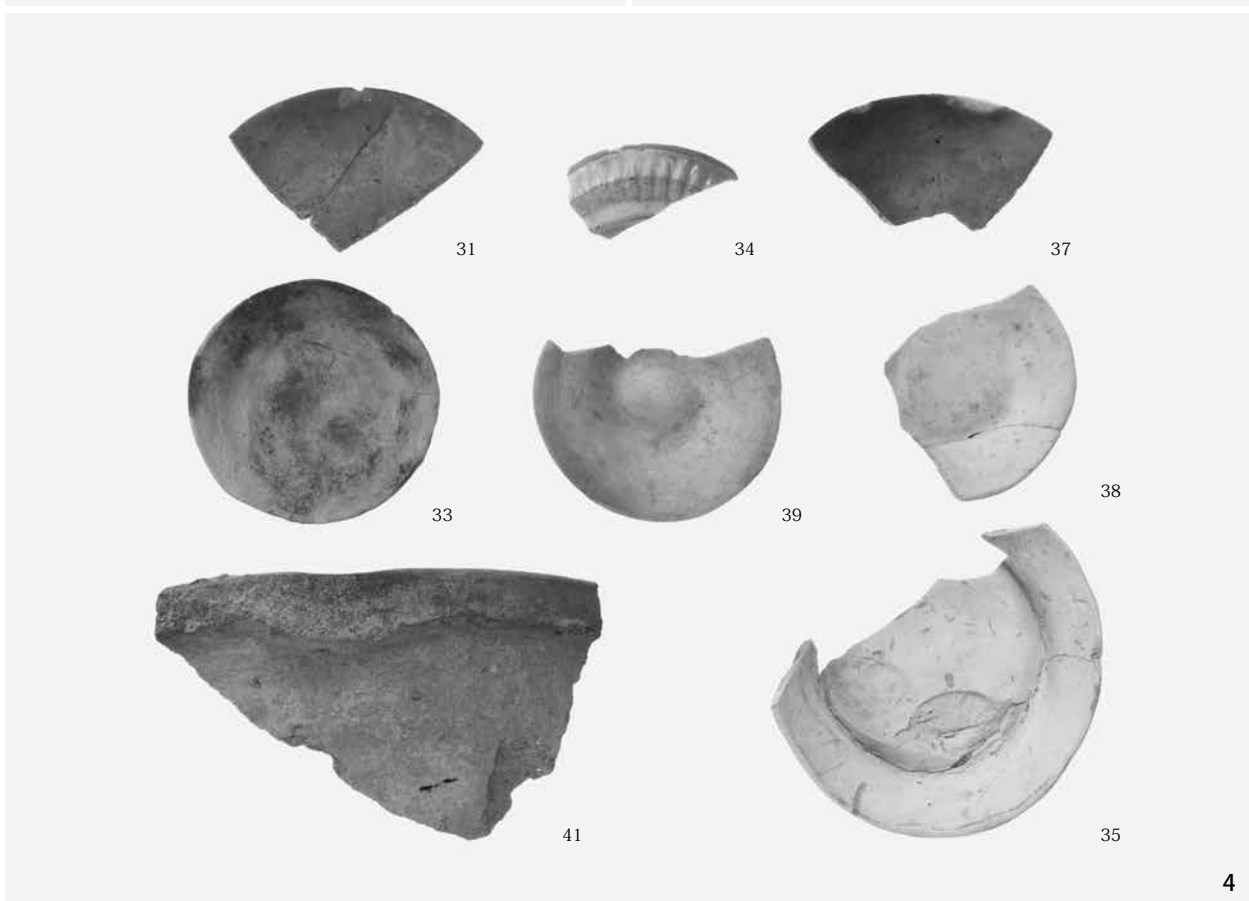


2. 第3面 27 落ち込み出土土器

写真図版 6

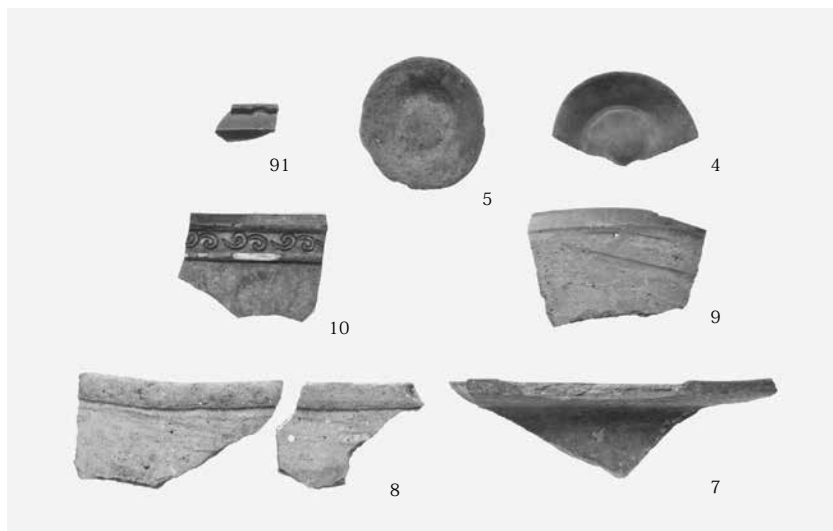


1. 第3面30土坑出土土器

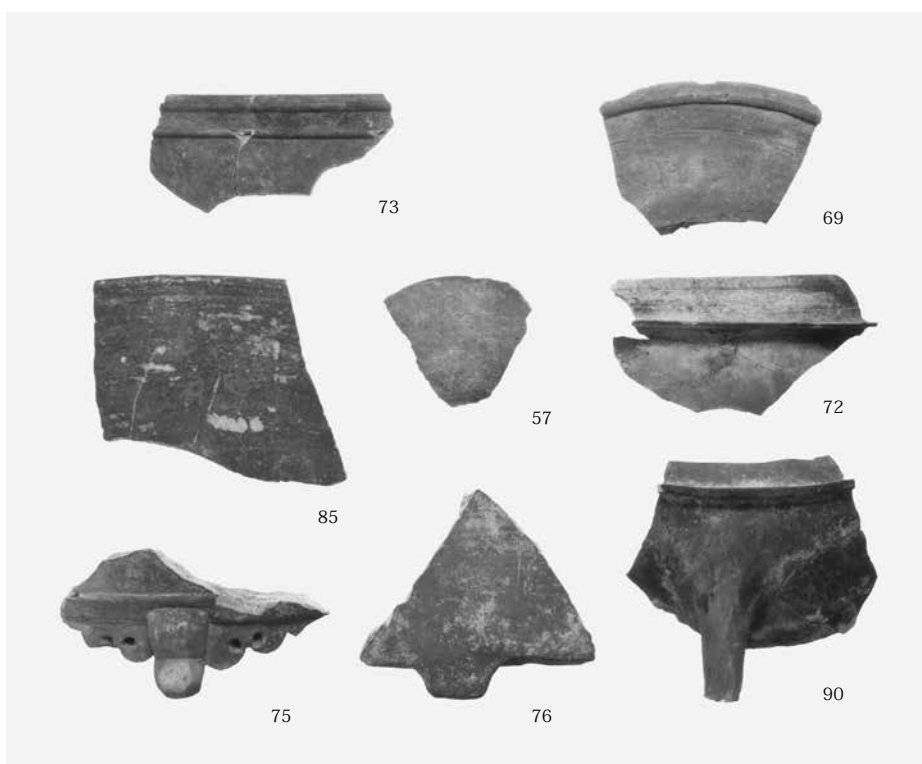


2. 第2面土器溜出土土器 3. 第2面18土坑・第1面4溝出土土器  
4. 第3面33土坑・35土坑・36土坑・48土坑・49土坑出土土器

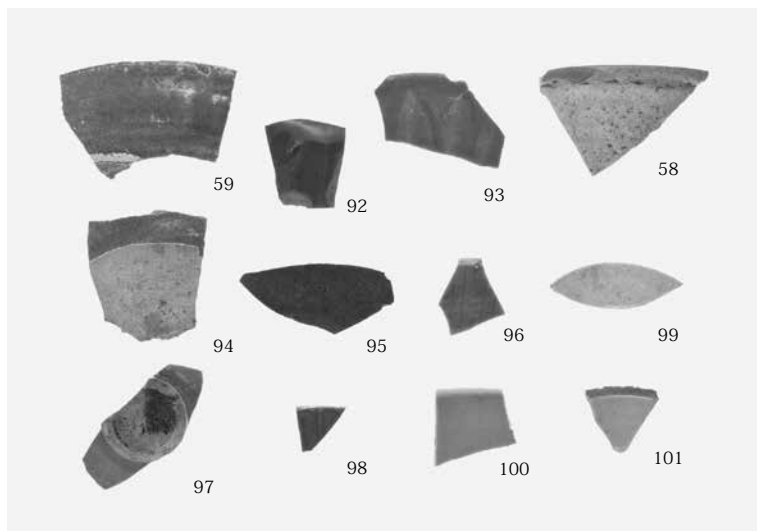




1. 第1層・第2層出土土器

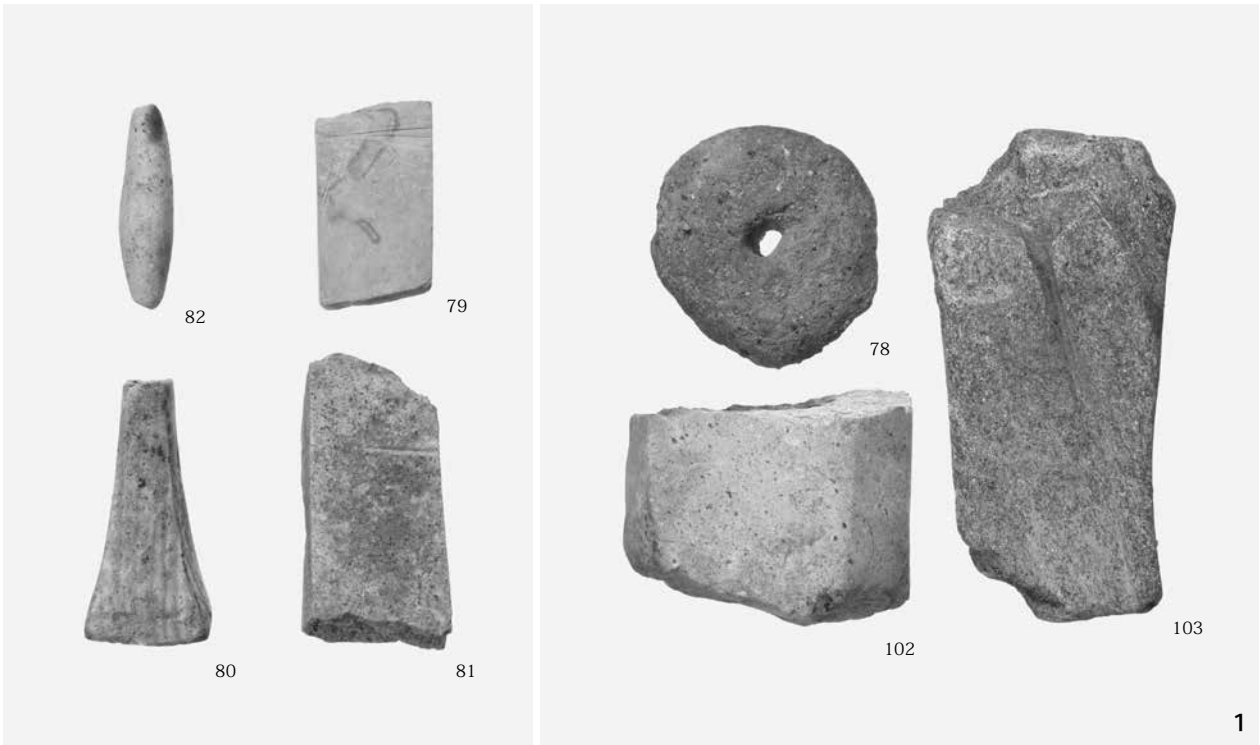


2. 第3層・第4層出土土器

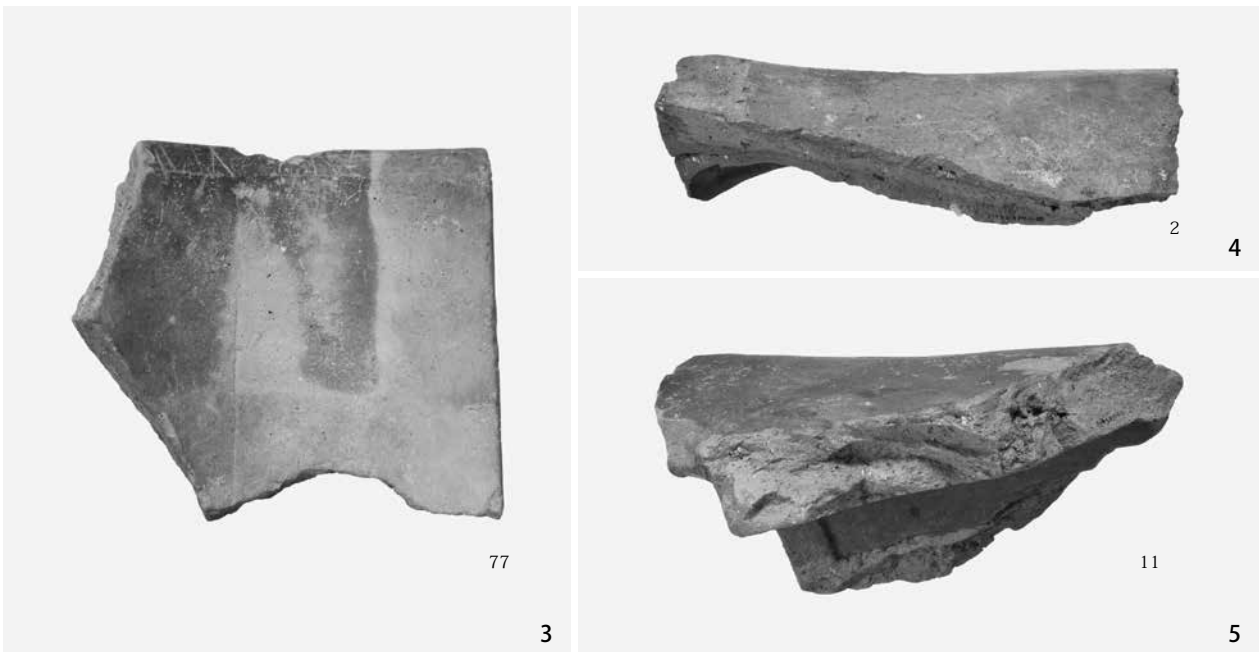
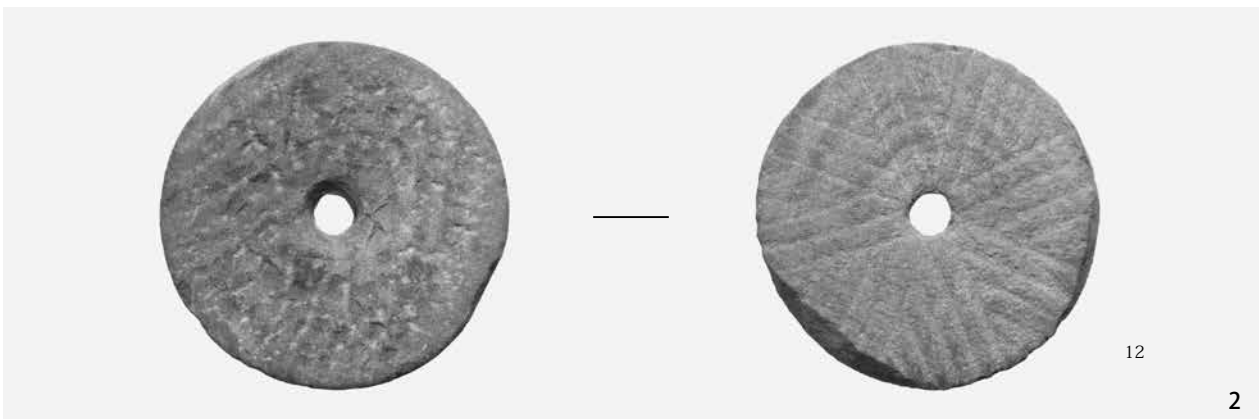


3. 陶磁器

写真図版 8



1. 石製品・土製品



2. 石臼 3. 平瓦 4. 軒丸瓦 5. 鳥衾瓦

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	はなやしきいせき							
書名	花屋敷遺跡 4							
副書名	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第286集							
編著者名	川瀬貴子							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2017年月8月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はなやしきいせき 花屋敷遺跡	おおさかふひがしおおさかし 大阪府東大阪市 よした 吉田1丁目地内	27227	87	34° 39′ 46″	135° 37′ 07″	20170403 ～ 20170428	130	近畿日本鉄道奈良 線連続立体交差化
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
花屋敷遺跡	集落	中世	溝・土坑・落ち込み	陶磁器・瓦器・瓦質土器・ 土師器・須恵器・瓦・石製 品・銭貨・土製品				
要約	調査区西側では鎌倉時代末から室町時代の溝や土坑を、中央から東側では、西から東に下がっていく落ち込みを検出した。遺構や包含層中からは土器や瓦、石製品など居住を示す遺物が多数出土した。花屋敷遺跡の集落域の東端が判明した。							



公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第286集

## 花屋敷遺跡 4

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査報告書

発行年月日 2017年8月31日

編集・発行 公益財団法人 大阪府文化財センター  
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 株式会社 近畿印刷センター  
〒581-0033 大阪府八尾市志紀町南2丁目131番地